

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。          受講生の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。          この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている</p>					
授業概要					
<p>受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。          そのうえで実際に作品の分析を試みる。          参加者同士の活発な質疑応答を期待する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。          何に、どのような興味があるのか、よく探ってみて欲しい。          研究発表には相当の準備が必要となる。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1	各人の研究テーマに応じて指導する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人の研究テーマに応じて指導する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
2	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
3	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
4	各人の研究テーマに応じた先行論文の読解。
5	受講者の研究発表と質疑応答。
6	受講者の研究発表と質疑応答。
7	受講者の研究発表と質疑応答。
8	受講者の研究発表と質疑応答。

科目名	音楽学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	前川 陽郁				
クラス名					
授業目的と到達目標					
先行研究の研究に留まるのではなく、根拠のしっかりしていない自分の考えに走るのでもなく、読書に裏付けられた思考を展開し、それを学位論文につなげられるよう、共に考えるという姿勢で指導を行なう。					
授業概要					
受講者の研究発表を中心とし、それをめぐる討論を研究の発展につなげる。また、先人の思考を自らの思考とできるような文献研究を行なう。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
十分な準備をして研究発表をすることが重要である。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常成績(研究発表および討論への参加)			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業時に適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。				

2	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
3	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
4	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
5	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
6	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
7	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
8	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	

科目名	音楽学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	前川 陽郁				
クラス名					
授業目的と到達目標					
先行研究の研究に留まるのではなく、根拠のしっかりしていない自分の考えに走るのでもなく、読書に裏付けられた思考を展開し、それを学位論文につなげられるよう、共に考えるという姿勢で指導を行なう。					
授業概要					
受講者の研究発表を中心とし、それをめぐる討論を研究の発展につなげる。また、先人の思考を自らの思考とできるような文献研究を行なう。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
十分な準備をして研究発表をすることが重要である。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常成績(研究発表および討論への参加)			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業時に適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。				

2	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
3	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
4	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
5	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
6	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
7	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	
8	研究発表と討論、必要に応じて文献講読。	

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	勝田 安彦				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>今、ミュージカルと呼ばれている演劇は 20 世紀にアメリカで形成発展して来た。初期に於いては極めて杜撰な台本が多かったが、1940 年代以降、ミュージカルの全ての構成要素を統べる要として台本が重要視されるようになり、その内容と様式は激変と言っても過言ではないほどの変化を蒙った。この授業では、BOOK MUSICAL と呼ばれるそれらのミュージカルの中から一作を選び、音楽を聴きながら精読することで、台本からミュージカルの特性を理解することを目指す。</p>					
授業概要					
英語のミュージカル台本の精読。出来れば数種類の音源を聴きながら、実際の舞台を想像しつつ精読する。作品は未定。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
テキストは授業開始時に配布する。受講者には精読箇所を毎回翻訳してもらうので、予習を欠かさないように。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業での翻訳の成果			50		
授業中の態度(積極性、意欲、予習の程度など)			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業の進め方についての説明
2	台本精読
3	台本精読
4	台本精読
5	台本精読
6	台本精読
7	台本精読
8	台本精読



科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	勝田 安彦				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>今、ミュージカルと呼ばれている演劇は 20 世紀にアメリカで形成発展して来た。初期に於いては極めて杜撰な台本が多かったが、1940 年代以降、ミュージカルの全ての構成要素を統べる要として台本が重要視されるようになり、その内容と様式は激変と言っても過言ではないほどの変化を蒙った。この授業では、BOOK MUSICAL と呼ばれるそれらのミュージカルの中から一作を選び、音楽を聴きながら精読することで、台本からミュージカルの特性を理解することを目指す。</p>					
授業概要					
英語のミュージカル台本の精読。出来れば数種類の音源を聴きながら、実際の舞台を想像しつつ精読する。作品は未定。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
テキストは授業開始時に配布する。受講者には精読箇所を毎回翻訳してもらうので、予習を欠かさないように。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業での翻訳の成果			50		
授業中の態度(積極性、意欲、予習の程度など)			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業の進め方についての説明
2	台本精読
3	台本精読
4	台本精読
5	台本精読
6	台本精読
7	台本精読
8	台本精読

科目名	デザイン特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	道田 健				
クラス名					
授業目的と到達目標					
研究テーマは人と社会の間にある課題を探し出し、改善することでより良い暮らしにしていけるプロセスに焦点を当てること。プロダクトデザインは人が何かを実現するために常に貢献してきたが、結果だけにとらわれず、絶え間なく変化する周辺環境の中で柔軟な解決策を提示できるような思考を養っていく。					
授業概要					
対面授業大学院での研究テーマに合わせて、調査をまとめ、仮設の検証を行うためのプロトタイプ制作などを実践していく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
研究内容については教員と相談、確認をとって進めること。毎回の授業には、調べたこと、研究したことを他人に見せる書式にまとめて来ること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
取組みと研究成果を見て総合的に判断します。			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
【道田 健】					

楽器メーカーの製品デザイン部門に勤務後、独立して製品デザイナーとして製品デザインや地場産業での商品開発、企業のデザインコンサルティングなどを行う。受賞歴: G マーク、レッドドットデザイン賞、IF デザイン賞など。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	ガイダンス: 取り組み方について。 ↓ 社会課題の発見と目的の検討。 ↓ 周辺状況の理解、過去の事例探し。 ↓ 分析と振り返り。 ↓ プロトタイプ作成と仮説の検証。 各ステップで精度を高めるために確認作業を行う。 思考の過程を振り返ることが出来るように研究課程をまとめる。

科目名	デザイン特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	道田 健				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>研究テーマは人と社会の間にある課題を探し出し、改善することでより良い暮らしにしていくプロセスに焦点を当てること。プロダクトデザインは人が何かを実現するために常に貢献してきたが、結果だけにとらわれず、絶え間なく変化する周辺環境の中で柔軟な解決策を提示できるような思考を養っていく。前期の研究を踏まえて後期はより具体的な改善方法を探っていく。</p>					
授業概要					
<p>大学院での研究テーマに合わせて、調査をまとめ、仮設の検証を行うためのプロトタイプ制作などを実践していく。後期はプロトタイプの制作を通しての検証作業に重点を置く。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>研究内容については教員と相談、確認をとって進めること。毎回の授業には、調べたこと、研究したことを他人に見せる書式にまとめて来ること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
取組みと研究成果を見て総合的に判断します。			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

【道田 健】楽器メーカーの製品デザイン部門に勤務後、独立して製品デザイナーとして製品デザインや地場産業での商品開発、企業のデザインコンサルティングなどを行う。受賞歴：G マーク、レッドドットデザイン賞、IF デザイン賞など。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	ガイダンス： 取り組み方について。 ↓ 社会課題の発見と目的の検討。 ↓ 周辺状況の理解、過去の事例探し。 ↓ 分析と振り返り。 ↓ プロトタイプ作成と仮説の検証。 各ステップで精度を高めるために確認作業を行う。 思考の過程を振り返ることが出来るように研究課程をまとめる。

科目名	演奏特殊研究Ⅳ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	辻 浩二				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽の歴史の中で、最も重要な時期は、17・17世紀といわれている。なぜなら、現代の音楽の基礎的な内容が最も発展した時期だからである。例えば、記譜法の進化・確立、楽器の発展、さらに音楽を取り巻く社会環境の変化が、めざましい。その内容について深く研究するとともに、その音楽芸術をいかに人々に伝えていくかという問題についても考え、今後の職業としての意識を高めていく。					
授業概要					
「正しい楽譜の読み方」という資料をもとに、楽譜の記譜法について研究する。この本は(バッハからシューベルトまで)という副題があり、現在の記譜法との違いから、当時の作曲家がどのような演奏を望んだのかを考える。そして、ニューヨークフィル・バーンスタインの「ヤング・ピープルズ・コンサート」のビデオを鑑賞し、音楽教育の必要性・方法等を考え、さらに、希望する作曲家について深くディスカッションをしていく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
映像や文献のみを一方向的に勉強するのではなく、感想を含め自分の感性にどのように感じたか、そしてそのことが今後の自分の音楽人生にどのように影響するのか、それらを含めたディスカッションをしていく。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出課題の評価及び平常点					
教科書情報					
教科書1	「正しい楽譜の読み方」ウィーン音楽大学インゴマー・ライナー教授の講義ノート				
出版社名	株式会社 現代ギター社	著者名	大島富士子		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	古楽とは何か				
出版社名	音楽之友社	著者名	ニコラウス・アーノンクール		
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
--------	--

授業計画(各回予定)	
------------	--

授業回	授業内容
1	映像や文献のみを一方向的に勉強するのではなく、感想を含め自分の感性にどのように感じたか、そしてそのことが今後の自分の音楽人生にどのように影響するのか、それらを含めたディスカッションをしていく。



科目名	音楽芸術学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	田之頭 一知				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽を学問的に研究することの意義を明らかにすることを目的とし、音楽を論理的に考察し、それを文章化することを目標とする。					
授業概要					
音楽を音楽として扱うことが、音楽を学問的に研究する場合に必要な態度である。しかし、それはいったいどのようなことなのか。本講義では音楽学、なかんずく、音楽美学あるいは音楽哲学と呼ばれる学問領域に根差しつつ、音楽の本質あるいは原理的基盤に関して講義を進めてゆく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
西洋において音楽は古来、学問的なものとみなされてきた。それが何を意味するのかを各自で考えてもらいたい。なお、授業計画に関しては、必要に応じて変更することがあるので、注意すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価(前期末レポートを含む)			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	必要があれば、授業中に指示する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>(1) ガイダンス</li> <li>(2) 音とは何か: 生活音①</li> <li>(3) 音とは何か: 生活音②</li> <li>(4) 音とは何か: 自然音</li> <li>(5) 音楽における音①</li> <li>(6) 音楽における音②</li> <li>(7) 調性について①</li> <li>(8) 調性について②</li> <li>(9) 音楽的リズムについて</li> <li>(10) ソナタ形式について</li> <li>(11) 音楽と時間①</li> <li>(12) 音楽と時間②</li> <li>(13) 音楽的時間</li> <li>(14) 音楽における時間のかたち</li> <li>(15) 前期のまとめ</li> </ul>

科目名	演奏特殊研究 V	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	水口 聡				
クラス名					
授業目的と到達目標					
高度な歌唱技術を身につけ、豊かな音楽性を育む					
授業概要					
オペラ・アリアを古典から現代までの時代も越えたあらゆる作品を取り上げ、正しいテクニックに基づいた歌唱表現を舞台上で実践できる歌手を育てる。さらに国際オペラコンクール、オペラ劇場を目指す学生の為のアドバイスを教授する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各自が取り組む曲目のアナリゼ					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期1年次:正しい呼吸法のもと、歌唱において必要な自然で豊かな声を出すことを目指す。				

	<p>前期2年次:個人のキャラクターに合わせたレパートリー作りをする。(ドラマ、スピント、リリコ、レッジャーロ等の分類)後期1年次:オペラ、それぞれにおける様式を習得し、それを表現に結び付ける。</p> <p>後期2年次:ステージ上でのマナー、表情、表現等を体得し、「真の舞台人」の育成を図る</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	演奏特殊研究 V	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	水口 聡				
クラス名					
授業目的と到達目標					
高度な歌唱技術を身につけ、豊かな音楽性を育む					
授業概要					
オペラ・アリアを古典から現代までの時代も越えたあらゆる作品を取り上げ、正しいテクニックに基づいた歌唱表現を舞台上で実践できる歌手を育てる。さらに国際オペラコンクール、オペラ劇場を目指す学生の為のアドバイスを教授する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各自が取り組む曲目のアナリゼ					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期1年次:正しい呼吸法のもと、歌唱において必要な自然で豊かな声を出すことを目指す。				

	<p>前期2年次:個人のキャラクターに合わせたレパートリー作りをする。(ドラマ、スピント、リリコ、レッジャーロ等の分類)後期1年次:オペラ、それぞれにおける様式を習得し、それを表現に結び付ける。</p> <p>後期2年次:ステージ上でのマナー、表情、表現等を体得し、「真の舞台人」の育成を図る</p>
--	--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------

科目名	音楽史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>本講義のテーマは「初期オペラの史的展開」。バロック・オペラの成立と史的な展開を、バロック最初期の作曲家クラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)とバロック後期の作曲家ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)のオペラ作品を中心に論じる。</p> <p>オペラとは何か、どのような歴史的な経緯の中で、どのようにして生まれ、どのようにして発展してきたのかを理解すること。オペラ作品の劇的な構造と音楽的な構造との理解を通じて、バロック・オペラの芸術的・学問的なおもしろさに目覚めること。</p>					
授業概要					
<p>前期では、音楽史におけるバロック時代の幕開けを告げるアルトゥージ＝モンテヴェルディ論争と「セコンダ・プラッティカ(第二の作法)」から説き起こして、モンテヴェルディの3大オペラ《オルフェオ》(1607)、《ウリッセの祖国帰還》(1641)、《ポッペアの戴冠》(1642)を中心に論じる。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと(週90分程度)。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業態度			30%		
議論への参加度			20		
中間・期末レポート			50%		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	裏声歌手のモンテヴェルディ偏愛主義、演奏・演出の現場から見た〈オルフェオ〉〈ウリッセ〉〈ポッペア〉〈ヴェスプロ〉				
出版社名	アルテスパブリッシング、2018	著者名	彌勒忠史		
参考書名2	対位法の変動・新音楽の胎動、ルネサンスからバロックへ、転換期の音楽理論				
出版社名	春秋社、2008	著者名	東川清一		
参考書名3	モンテヴェルディ				
出版社名	音楽之友社	著者名	ヴルフ・コーノルド編 津上智実訳		
参考書名4	モンテヴェルディ				
出版社名	みすず書房 1983	著者名	デニス・アーノルド編 後藤暢子、戸口幸策訳		
参考書名5	モンテヴェルディ:オルフェオ、グルック:オルフェオとエウリディーチェ				
出版社名	名作オペラボックス 29、音楽之友社、1989	著者名	アッティラ・チャンパイ、ディートマル・ホラント編 寺本まり子、津上智実訳		

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	前期:オペラの成立と初期の展開(1) 導入:オペラの誕生とバロック時代
2	(2)カメラータとモノディー
3	(3)アルトゥージ論争とセコンダ・プラッティカ
4	(4)モンテヴェルディ《オルフェオ》(1607)
5	(5)《オルフェオ》の2つの世界
6	(6)《オルフェオ》の構造
7	(7)モンテヴェルディ《アリアンナの嘆き》(1608)
8	(8)モンテヴェルディ《タンクレディとクロリンダの戦い》(1618)
9	(9)モンテヴェルディ《ウリッセの祖国帰還》
10	(10)《ウリッセの祖国帰還》に見る英雄
11	(11)《ウリッセの祖国帰還》に見る貞女
12	(12)モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》(1643)
13	(13)《ポッペアの戴冠》に見る興奮様式
14	(14)《ポッペアの戴冠》に見る愛の二重唱
15	(15)総括



科目名	音楽史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>本講義のテーマは「初期オペラの史的展開」。バロック・オペラの成立と史的な展開を、バロック最初期の作曲家クラウディオ・モンテヴェルディ(1567-1643)とバロック後期の作曲家ゲオルク・フリードリヒ・ヘンデル(1685-1759)のオペラ作品を中心に論じる。</p> <p>オペラとは何か、どのような歴史的な経緯の中で、どのようにして生まれ、どのようにして発展してきたのかを理解すること。オペラ作品の劇的な構造と音楽的な構造との理解を通じて、バロック・オペラの芸術的・学問的なおもしろさに目覚めること。</p>					
授業概要					
後期では、ヨーロッパにおけるバロック・オペラの系譜を大きく掴んで、フランスのコメディ・バレとナポリ派オペラの典型を理解した上で、ヘンデルのオペラ作品、とりわけ《ジュリオ・チェーザレ》と《セルセ》を中心に論じる。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと(週 90 分程度)。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業態度			30%		
議論への参加度			20		
中間・期末レポート			50%		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	新イタリア・オペラ史				
出版社名	音楽之友社、2015	著者名	水谷彰良		
参考書名2	ヘンデル:創造のダイナミズム				
出版社名	春秋社、2009	著者名	ドナルド・パロウズ編 藤江効子、小林裕子、三ヶ尻正訳		
参考書名3	ヘンデル				
出版社名	作曲家・人と作品シリーズ、音楽之友社、2007	著者名	三澤寿喜		
参考書名4	ヘンデル、オペラ・セリアの世界				
出版社名	春秋社、2005	著者名	4) ウィントン・ディーン編 藤江効子、小林裕子訳		
参考書名5	ヘンデル				
出版社名	東京書籍、1991	著者名	クリストファー・ホグウッド編 三澤寿喜訳		
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	後期:後期バロックのオペラ (1)バロック・オペラの系譜
2	(2)J. B. リュリのコメディ・バレ《町人貴族》(1670)
3	(3)《町人貴族》の主要曲と特徴
4	(4)A. スカルラッチェのオペラ《グリゼルダ》(1721)
5	(5)《グリゼルダ》の主要曲と特徴
6	(6)G. F. ヘンデル(1685-1759)のオペラ創作
7	(7)ヘンデルのオペラ《ジューリオ・チェーザレ》(1724)
8	(8)《ジューリオ・チェーザレ》:プリモ・ウオーモのアリア
9	(9)《ジューリオ・チェーザレ》:プリマ・ドンナのアリア
10	(10)《ジューリオ・チェーザレ》:その他の登場人物のアリア
11	(11)アリアと情緒表現
12	(12)ヘンデルのオペラ《セルセ》(1738)
13	(13)《セルセ》:プリモ・ウオーモのアリア
14	(14)《セルセ》:プリマ・ドンナのアリア
15	(15) 総括

科目名	絵画特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	西田 真人				
クラス名					
授業目的と到達目標					
【前期】模写(手本は東洋の古典に限らず、世界の近・現代の絵画も含める)を通じて、各自で色や線、造形や絵画空間、様々な表現技法を探り鑑賞力、表現力を養う。					
授業概要					
【前期】前半では共通課題「竹内浩一・〇仔(10号F)」を模写。その間後半の各自模写手本を決定。5回で各自の関心に応じて1点の模写制作。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
【前期】最初の共通課題で使用する日本画絵の具類は研究室で用意しますが、基底材(F10号麻紙ボード)は受講生で用意してください。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
【前期・後期】課題作品及び総合評価			100%		
教科書情報					
教科書1	【前期】制作プロセスのカラー資料 20 枚は研究室で用意				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	【前期】人気作家に学ぶ日本画の技法⑤動物を描く・竹内浩一 1994年同朋舎出版				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
絵画特殊研究 I の前期・後期は、それぞれ授業内容・担当教員が異なり、それぞれ前期・後期で完結している。評価基準等も異なるので注意。					
教員実務経験					

【前期】西田真人 日本画家(公益社団法人日展特別会員) 日本画家の教員が多数の作品を制作発表してきた経験を活かし、日本画を描くための方法や技術を習得させる。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	【前期】 1. 前期授業内容のガイダンス
2	2. 竹内浩一・仔(10号) 下絵のトレース、骨描き
3	3. " 下地制作
4	4. " 彩色 適宜個別指導
5	5. " 彩色 適宜個別指導 次の課題についての指導
6	6. " 彩色 適宜個別指導 "
7	7. " 彩色 適宜個別指導 "
8	8. " 彩色 適宜個別指導 "
9	9. " 彩色 適宜個別指導 "
10	10. " 仕上げ 合評会及び次回からの各自選定手本模写についての確認
11	11. 各自選定手本の制作。適宜個別指導
12	12. 各自選定手本の制作。適宜個別指導
13	13. 各自選定手本の制作。適宜個別指導
14	14. 各自選定手本の制作。適宜個別指導
15	15. 各自選定手本の制作。適宜個別指導 合評会

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	瀧本 雅志				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。</p>					
授業概要					
<p>学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置を確認する。→2)授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション →4)フィードバック → その後、3)と4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	瀧本 雅志				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>旧来の専門科目の枠に囚われず、研究テーマに適した様々な概念装置を、積極的に開発・活用しながら研究を進めてゆくことを目標とする。芸術学や批評理論にくわえて、哲学・現代思想・精神分析・メディア論・記号論等も適宜参考にし、ときには理科系の諸学の知見も援用する。諸芸術やデザイン、ポップカルチャーについて「現代的な」問題意識で考え感じようとする学生にとって、とりわけ触発や支援となる場の形成を目指してゆく。</p>					
授業概要					
<p>学生が研究対象のどのような可能性の中心を探ろうとするかを明確化する作業をサポートする。学生に、研究について口頭または文面で論じてもらい、その有効性や意義について共に分析するセッションを実施。その成果を次回にフィードバックさせ、次第に研究の強度を高めてゆく。そのためにも、議論や観点に有用な書物や論文を共同で探る。あるいは、直観的に感動的な作品や現象に魅了される喜びを重視し、その言語化をドライブする。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
受講生各々の問題意識やニーズにあわせて、適宜アドバイスを行う。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1)受講者の研究テーマと現在利用している概念装置を確認する。→2)授業の具体的なプログラムを共に立案する。→3)セッション →4)フィードバック → その後、3)と4)を繰り返す。また、ときおり有益なブレイクを挟む。



科目名	演奏特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	伊勢 敏之、本田 耕一				
クラス名					
授業目的と到達目標					
取り上げた楽曲の詳細な分析、作曲家の時代背景、作曲の経緯などや、それに伴った演奏スタイルを研究し、より深く掘り下げ徹底した研究をすることを通じて、演奏家として必要である豊富な知識を身に付け、実際の演奏に役立てるようになることを目的とする。					
授業概要					
<p>対面授業・取り上げる楽曲を決め、楽曲や作曲家について研究してきたことをプレゼンテーションする。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲分析をする。また分析のノウハウなどを学ぶ。</li> <li>・研究した成果を通じて、実際の演奏へと反映し、以前の演奏とどう変わったかを確認する。</li> <li>・CD、DVD等の鑑賞を通じた秀逸な演奏の研究。</li> <li>・録音をし、自らの演奏を客観的にチェック。</li> </ul>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>研究したい楽曲を決定し、教員や伴奏者の分など、必要に応じた楽譜を準備する。          次回までのやるべき課題を課すので、必ずやり遂げる。          ※受講者数、研究や練習状況の進捗、取り組み曲の規模などによっては研究で取り上げる曲を減らすことがある。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(受講姿勢、課題の達成状況など)			50%		
研究レポート・プレゼンテーションの内容			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	[[第1回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ] ● 第1回 ガイダンス(方針説明、成績評価方法の説明等) 取り組む楽曲や研究課題の相談・決定 [第2回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習(標準8時間)]
2	● 第2回 作曲家・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック [第3回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
3	● 第3回取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第4回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
4	● 第4回 取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第5回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
5	● 第5回 取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践 [第6回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
6	● 第6回 取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 [第7回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習(標準5時間)]
7	● 第7回 研究成果の演奏発表 録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について [第8回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ]
8	● 第8回 取り組む楽曲や研究課題の相談・方針決定 [第9回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習(標準8時間)]
9	● 第9回 作曲家・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック [第10回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
10	● 第10回 取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第11回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
11	● 第11回

	<p>取り組む楽曲の分析②          楽曲の構造、構成について          演奏実践          [第12回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
12	<p>● 第12回          取り組む楽曲の分析③          調性・和声について          演奏実践          [第13回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
13	<p>● 第13回          取り組む楽曲の分析④          各フレーズのデザイン、表情・表現について          演奏実践          [第14回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
14	<p>● 第14回          研究成果の演奏発表 録音・録画など          学生どうしや教員によるフィードバック          今後の課題や練習上の留意点について          [第15回へ向けた分析の復習と振り返り・気づきをまとめる(標準2時間)]</p>
15	<p>● 第15回          まとめ、前期の総括、振り返り・気づきの発表など          今後の課題や練習上の留意点について</p>

科目名	演奏特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	伊勢 敏之、本田 耕一				
クラス名					
授業目的と到達目標					
取り上げた楽曲の詳細な分析、作曲家の時代背景、作曲の経緯などや、それに伴った演奏スタイルを研究し、より深く掘り下げ徹底した研究をすることを通じて、演奏家として必要である豊富な知識を身に付け、実際の演奏に役立てるようになることを目的とする。					
授業概要					
対面授業・取り上げる楽曲を決め、楽曲や作曲家について研究してきたことをプレゼンテーションする。 <ul style="list-style-type: none"> <li>・楽曲分析をする。また分析のノウハウなどを学ぶ。</li> <li>・研究した成果を通じて、実際の演奏へと反映し、以前の演奏とどう変わったかを確認する。</li> <li>・CD、DVD等の鑑賞を通じた秀逸な演奏の研究。</li> <li>・録音をし、自らの演奏を客観的にチェック。</li> </ul>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
研究したい楽曲を決定し、教員や伴奏者の分など、必要に応じた楽譜を準備する。 次回までのやるべき課題を課すので、必ずやり遂げる。 ※受講者数、研究や練習状況の進捗、取り組み曲の規模などによっては研究で取り上げる曲を減らすことがある。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(受講姿勢、課題の達成状況など)			50%		
研究レポート・プレゼンテーションの内容			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	[[第1回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ] ● 第1回 ガイダンス(方針説明、成績評価方法の説明等) 取り組む楽曲や研究課題の相談・決定 [第2回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習(標準8時間)]
2	● 第2回 作曲家・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック [第3回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
3	● 第3回 取り組む楽曲の分析①楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第4回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
4	● 第4回 取り組む楽曲の分析② 楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第5回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
5	● 第5回 取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践 [第6回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
6	● 第6回 取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 [第7回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習(標準5時間)]
7	● 第7回 研究成果の演奏発表 録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について [第8回へ向けて、取り組みたい候補楽曲のピックアップ]
8	● 第8回 取り組む楽曲や研究課題の相談・方針決定 [第9回へ向けてのレポートや Power Point などを用いた研究発表の準備と楽曲の練習(標準8時間)]
9	● 第9回 作曲家・作曲背景、作品そのものについての研究発表と学生どうしや教員によるフィードバック [第10回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
10	● 第10回取り組む楽曲の分析① 楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第11回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]
11	● 第11回 取り組む楽曲の分析②

	<p>楽曲の構造、構成について 演奏実践 [第12回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
12	<p>● 第12回 取り組む楽曲の分析③ 調性・和声について 演奏実践 [第13回へ向けた分析の予習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
13	<p>● 第13回 取り組む楽曲の分析④ 各フレーズのデザイン、表情・表現について 演奏実践 [第14回発表へ向けた分析の復習と楽曲の練習(標準5時間)]</p>
14	<p>● 第14回 研究成果の演奏発表 録音・録画など 学生どうしや教員によるフィードバック 今後の課題や練習上の留意点について [第15回へ向けた分析の復習と振り返り・気づきをまとめる(標準2時間)]</p>
15	<p>● 第15回 まとめ、前期の総括、振り返り・気づきの発表など 今後の課題や練習上の留意点について</p>

科目名	美学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	加藤 哲弘				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神にある「自由の精神」と「創造性」に深く関わる「美学」という学問がじっさいにはどのようなものであるのかを理解できるようになることを目的とする。芸術にたずさわる大学院生として、美学の正確な意味とその現代的課題を他人に伝えることができるようになることを目指したい。					
授業概要					
第2回から第14回まで各回ごとに、近代における日本の美意識を論じた古典的な文献を採りあげて、内容紹介と検討を行う。具体的には、明治初期から現代に至るまでの理論家や芸術家たちによる著作の内容を毎回概観する。なお下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合がある。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
講義までに授業資料として提示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに自らの制作や研究課題に直結する問題意識とともに理解すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など)			100%		
教科書情報					
教科書1	UNIPA 経由で事前にプリントを配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『美学の事典』				
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編		
参考書名2	『東西芸術精神の伝統と交流』				
出版社名	理想社	著者名	山本正男		
参考書名3	『敗者の精神史』				
出版社名	岩波書店	著者名	山口昌男		
参考書名4	『絵画の領分』				
出版社名	朝日新聞社	著者名	芳賀徹		
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

関西学院大学博物館長(2020-21年度)	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1 09/22 講義概要
2	2 09/29 志賀重昂『日本風景論』
3	3 10/06 ハーン『知られぬ日本の面影』
4	4 10/14 岡倉覚三『茶の本』
5	5 10/20 柳宗悦『雑器の美』
6	6 10/27 九鬼周造『「いき」の構造』
7	7 11/10 谷崎潤一郎『陰翳礼賛』
8	8 11/17 和辻哲郎『風土』『古寺巡礼』
9	9 11/27 (未定)
10	10 12/01 タウト『日本の家屋と生活』
11	11 12/08 岸田劉生『美の本体』
12	12 12/15 矢代幸雄『日本美術の特質』
13	13 12/22 岡本太郎『日本の伝統』
14	14 01/19 四方田犬彦『「かわいい」論』
15	15 01/26 まとめとコメント



科目名	芸術学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	加藤 哲弘				
クラス名					
授業目的と到達目標					
現代美術における古典的作品と現代美術を論じる古典的な批評言説についての基本的な理解を得ることを目的とする。本講義で得られた知見を各自の作品制作や批評活動に活かすとともに、受講生が、芸術を学ぶ大学院生として、建学の精神にもある創造性を身につけ、自らの立脚点を自覚できるようになることを目指したい。					
授業概要					
20世紀末から21世紀の現在に至るまでのアートの展開の中から古典的と呼ばれる作品を採りあげ、その紹介と討論を行う。基本的にはテキスト(日本語訳)の講読と討論を通して、現代アートを論じる際に念頭に置いておくべき基礎的な文献の解題を行う。なお、下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合がある。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
講義までに指示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに問題意識とともに理解するようにすること。また、機会があれば、ビエンナーレや国際展などの現代アートの展覧会を訪れたり、美術館における作品展示を見たりしておくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など)			100%		
教科書情報					
教科書1	UNIPA 経由で授業資料を配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『美学の事典』				
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編		
参考書名2	『現代美術史 欧米、日本、トランスナショナル』				
出版社名	中央公論新社	著者名	山本浩貴		
参考書名3	『20世紀美術』				
出版社名	筑摩書房	著者名	高階秀爾		
参考書名4	『アート:“芸術”が終わった後の“アート”』				
出版社名	朝日出版社	著者名	松井みどり		
参考書名5	『なぜ、これがアートなの?』				
出版社名	淡交社	著者名	アレナス		
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
関西学院大学博物館長(2020-21年度)	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1 0922 講義概要(モダンとポストモダン)
2	2 0929 ポストモダニズム建築
3	3 1006 パフォーマンスインスタレーション
4	4 1014(火)パブリックアート
5	5 1020 メディア芸術(マクレーハン)
6	6 1027 ポストコロニアル(サイド)
7	7 1110 ジェンダー(ボロック)
8	8 1117 ポップからサブカルチャー
9	9 1127(未定)
10	10 1201 脱構築建築(隈研吾)
11	11 1208 SEA 社会連携のアート
12	12 1215 NFT アート作品の唯一性と複製
13	13 1222 芸術のグローバル化とディアスポラ
14	14 0119 アクティヴィズム(バンクシー)
15	15 0126 まとめとコメント

科目名	工芸特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	釜本 幸治				
クラス名					
授業目的と到達目標					
鑄金、鍛金、彫金など金工の技法に触れ、金属素材についての基礎知識と基礎技術の習得を目的とする。					
授業概要					
金属板を金鋸や木槌で叩いて加工する鍛金技法により作品制作を行います。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
金属工芸では制作にあたって専門機具や薬品、火気等を使用します。 必ず作業に適した服装を着用して下さい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
制作作品			60%		
制作姿勢			40		
教科書情報					
教科書1					
出版社名			著者名		
教科書2					
出版社名			著者名		
教科書3					
出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
金工家として作品制作や発表の経験を活かした指導を行います。					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	課題説明				

2	作品構想・アイデアチェック	
3	鍛金作業	
4	鍛金作業	
5	鍛金作業	
6	鍛金作業	
7	鍛金作業	
8	鍛金作業	
9	鍛金作業	
10	鍛金作業	
11	鍛金作業	
12	鍛金作業	
13	仕上げ	
14	仕上げ	
15	合評	

科目名	工芸特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	釜本 幸治				
クラス名					
授業目的と到達目標					
鑄金、鍛金、彫金など金工の技法に触れ、金属素材についての基礎知識と基礎技術の習得を目的とする。					
授業概要					
アルミニウムを素材に鑄造作品を制作します。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
金属工芸では制作にあたって専門機具や薬品、火気等を使用します。 必ず作業に適した服装を着用して下さい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
制作作品			60%		
制作姿勢			40		
教科書情報					
教科書1					
出版社名			著者名		
教科書2					
出版社名			著者名		
教科書3					
出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
金工家として作品制作や発表の経験を活かした指導を行います。					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	課題説明				

2	作品構想・アイデアチェック	
3	鑄造原型制作	
4	鑄造原型制作	
5	鑄造原型制作	
6	鑄造原型制作	
7	鑄型制作	
8	鑄型制作	
9	鑄型制作	
10	鑄造	
11	鑄造	
12	仕上げ	
13	仕上げ	
14	仕上げ	
15	合評	

科目名	文学創作特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	木下 昌輝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神である「創造性の奨励」に基づき、プロのエンタメ作家として通用するための独自の創作メソッドを作りあげる。					
授業概要					
映画ドラマなどの映像作品を鑑賞して、プロットや創作メソッドに分解して落とし込む。それを通じて、自分なりの創作メソッドを作りあげる。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
出席と授業態度			50		
最後に創作メソッドの発表、もしくは既存の創作メソッドを使って、長編プロットを発表する。			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。				

	後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
2	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
3	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
4	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
5	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
6	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
7	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
8	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
9	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
10	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
11	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
12	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
13	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
14	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
15	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。



科目名	文学創作特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	木下 昌輝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神である「創造性の奨励」に基づき、プロのエンタメ作家として通用するための独自の創作メソッドを作りあげる。					
授業概要					
映画ドラマなどの映像作品を鑑賞して、プロットや創作メソッドに分解して落とし込む。それを通じて、自分なりの創作メソッドを作りあげる。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
出席と授業態度			50		
最後に創作メソッドの発表、もしくは既存の創作メソッドを使って、長編プロットを発表する。			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。				

	後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
2	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
3	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
4	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
5	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
6	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
7	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
8	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
9	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
10	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
11	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
12	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
13	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
14	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。
15	前期は映画ドラマなどの鑑賞と、その解析。 後期は自分なりのメソッドの作成、もしくは長編プロットの作成。

科目名	現代美術特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	永田 靖				
クラス名					
授業目的と到達目標					
現代芸術を特徴づけるパフォーマンス・アートの歴史的系譜を辿りながら、美術と演劇の相互関係とその特質や社会的機能を考察する。あわせて20世紀のパフォーマンス・アートの概観を理解する。					
授業概要					
20世紀芸術を特徴づけるパフォーマンス・アートや演劇と美術とは不可分の関係がある。ここでは舞台美術と絵画との相互関係を考察し、20世紀初頭から現代までの際立った傾向である、伝統主義、未来派、構成主義、表現主義など世紀前半期のアヴァンギャルド・パフォーマンスの解説を行う。また60年代のパフォーマンス・アート、アンダー・グラウンド演劇などからサイト・スペシフィック・パフォーマンスなど現代的な取り組みまでを概観して、美術とパフォーマンスがどのような関係にあるのかを考察する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業の理解度			40%		
レポート			60		
教科書情報					
教科書1	特に用いない				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業中に随時紹介する				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	イントロダクションを行う。授業全体の方向性の説明とパフォーマンス・アートについての基本的な考え方の導入を行う。
2	パフォーマンス・アートの前史としての演劇の伝統主義の問題について説明する。演劇、絵画、バレエなど広範な領域に見られたこの傾向の意味を考察しつつ、演劇と美術の関係を理解する。
3	20世紀初頭のアヴァンギャルドの動きの中にパフォーマンス・アートの胎動が見られる。ロシアとイタリアに起こった未来派の仕事について解説し、その舞台美術に際立って示される時間と空間の相対化の質について考察する。
4	未来派とほぼ同時期に始まる構成主義の演劇、美術、造型芸術、映画などの実践と理念について検討し、演劇と美術との本質的な相互関係を考察する。
5	世紀初頭のアヴァンギャルドの表現主義について解説し、そこで果たした舞台美術の機能を理解し、その主体と心理の表現の実相と理念について考察する。
6	20年代に展開したモダニズムの実践の一つとしてバウハウスの試みを取り上げてその美術とパフォーマンスの関係の今日性を考察する。
7	再現的な芸術の問題点を理解した上でその乗り越えを企てたシュールリアリズムについて、その演劇、絵画、映画の運動を解説し、政治性との交差についても考察する。
8	パフォーマンス・アートの持つ身体の特権的な役割を展開していく前史としてのモダン・ダンスについて解説し、その現代性とパフォーマンス・アートへの接続の様相について考察する。
9	60年代に世界で様々に展開されたパフォーマンス・アートについて、身体、神話、大衆、日常など鍵になる考え方と実践について解説し、その今日性を考察する。
10	パフォーマンス・アートとデジタル・メディアの相互関係について考察する。舞台美術にデジタル映像を用いられるようになる現代のパフォーマンス・アートの特質を考察する。
11	パフォーマンス・アートの取り組みの一つにアイデンティティの探求があると考えられるが、その極限の表現としてのボディ・ワークの様々な実践について解説し、現代パフォーマンス・アートの水脈を理解する。
12	パフォーマンス・アートは既成の芸術史を踏み越えて行くがその一つの要因にインターカルチュラルな題材との取り組みが挙げられる。それらのパフォーマンスの取り組みについて考察する。
13	現代のパフォーマンス・アートがもっとも多様に展開される一つにメディア・アートがある。ここではそのマルチメディア・パフォーマンスの多様な実践について解説し、その今日性を考察する。
14	現代のパフォーマンス・アートを特徴付ける要因の一つに場所の考察があり、それらは数多くのアートとなって展開されている。ここではそのようなサイト・スペシフィック・パフォーマンスの探求について解説し、考察する。
15	授業全体のまとめを行う。

科目名	現代美術特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	永田 靖				
クラス名					
授業目的と到達目標					
パフォーマンス・エコロジーと題して、パフォーマンス・アートの中で、自然環境やエコロジーをテーマにした取り組みについて解説し、考察していく。パフォーマンス・アートがいかに現代的な課題に向き合って探求しているかを理解する。					
授業概要					
20世紀芸術を特徴づけるパフォーマンス・アートの概観を行った後に、20世紀初頭から現代までの、伝統主義、未来派、構成主義、表現主義など世紀前半期のアヴァンギャルド・パフォーマンスの解説を行う。その後、60年代のパフォーマンス・アート、アンダー・グラウンド演劇などからサイト・スペシフィック・パフォーマンスなど現代的な取り組みまでを概観する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業の理解度			40%		
レポート			60		
教科書情報					
教科書1	特になし				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業中に適宜紹介する				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	イントロダクション。授業全体の方向性と基本的な概念の導入を行う。
2	自然破壊とパフォーマンス(1) 主として20世紀のパフォーマンスを取り上げていくが、まずは自然破壊について探求した劇パフォーマンスを取り上げて考察する。第1回目は、いわゆるモダン・ドラマの中での自然破壊について論究したものである。『ワーニャ』『野鴨』『人民の敵』など作品中の主題と関わる形式で考察されている作品を取り上げて20世紀初頭のパフォーマンスの中でどのように探求されたかを考察する。
3	自然破壊とパフォーマンス(2) 20世紀の近代化、産業化が進む過程で現実の自然破壊に向き合いながら探求した『火山灰地』『彼らの声が聞こえるか』などの作品を取り上げ、そのプロセスや意義を考察する。
4	動物のパフォーマンス(1) パフォーマンス・アートには動物を主題するものが少なからずあり、人間第一主義の超克を企てている。『ココーテ』『毛猿』『うたよみざる』など様々なアートを例にその理念と意義を考察する。
5	動物のパフォーマンス(2) パフォーマンス・アートには動物を主題するものが少なからずあり、人間第一主義の超克を企てている。『ココーテ』『毛猿』『うたよみざる』など様々なアートを例にその理念と意義を考察する。
6	災害と自然(1) 20世紀に繰り返し人類を襲った自然災害についてパフォーマンスは常に取り上げてきた。地震、干ばつ、台風、森林火事など様々な自然災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
7	災害と自然(2) 20世紀に繰り返し人類を襲った自然災害についてパフォーマンスは常に取り上げてきた。地震、干ばつ、台風、森林火事など様々な自然災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
8	災害と自然(3) 20世紀に繰り返し人類を襲ったのは自然災害ばかりではなく、戦争、戦闘、爆弾、原爆、核などの人為的な災害についてももについてパフォーマンスは常に取り上げてきた。ここではそのような災害についてパフォーマンスはどのように取り組んできたのか、その可能性と問題点について考察する。
9	ポスト・ヒューマン・パフォーマンス(1) 近年のポスト・ヒューマニズムのパフォーマンスの中から特徴的なものを取り上げ、その今日的な意義を考察する。
10	ポスト・ヒューマン・パフォーマンス(2) 近年のポスト・ヒューマニズムのパフォーマンスの中から特徴的なものを取り上げ、その今日的な意義を考察する。
11	エコ・ドラマツルギー(1) 現在、自然環境と文学についての取り組みの批評的アプローチは、「エコ・クリティシズム」と呼ばれる批評群が主として担っている。多くは英米圏の文学研究の中から生まれて来ているが、パフォーマンスが今日の自然環境問題、地球規模の温暖化、環境破壊にどう対処できるのか、その方向については主だった批評軸ははまだ確立されていない。ここでは、様々な事例を取り上げながら「エコ・ドラマツルギー」の可能性を考察する。
12	エコ・ドラマツルギー(2) 現在、自然環境と文学についての取り組みの批評的アプローチは、「エコ・クリティシズム」と呼ばれる批評群が主として担っている。多くは英米圏の文学研究の中から生まれて来ているが、パフォーマンスが今日の自然環境問題、地球規模の温暖化、環境破壊にどう対処できるのか、その方向については主だった批評軸ははまだ確立されていない。ここでは、様々な事例を取り上げながら「エコ・ドラマツルギー」の可能性を考察する。
13	未来社会とエコロジー(1) 高度に発達した情報科学技術は人間社会を根本的に変化させつつあるが、そのエコロジーを考察するのが急務となっている。テクノロジーの描く未来社会についても数多くのパフォーマンスが取り

	組んでその意義を考察している。ここではこれらのテクノロジーと人間の問題をパフォーマンスがどのように向き合っているのか考え、未来のエコロジカル・パフォーマンスを展望する。
14	<p>未来社会とエコロジー(2)</p> <p>高度に発達した情報科学技術は人間社会を根本的に変化させつつあるが、そのエコロジーを考察するのが急務となっている。テクノロジーの描く未来社会についても数多くのパフォーマンスが取り組んでその意義を考察している。ここではこれらのテクノロジーと人間の問題をパフォーマンスがどのように向き合っているのか考え、未来のエコロジカル・パフォーマンスを展望する。</p>
15	授業全体のまとめを行う。

科目名	美術史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	河田 昌之				
クラス名					
授業目的と到達目標					
日本美術の特徴を作品内容の読み解きを通して理解することを目指します。仏画、物語や随筆、意匠などさまざまなジャンルに分類されるなかから、代表的な古美術作品を選んで、独自の造形感覚や表現を考えながら、日本美術に対して多くの視点を持つことを目標にします。					
授業概要					
伊勢物語は源氏物語と並ぶ平安時代を代表する古典文学として知られています。「むかし、をとこありけり」をどこかで聞いたことがあるでしょう。中学、高校時代に習ったことがある人も多いかと思います。在原業平(825～880)はこの物語の主人公として、今も人気が衰えません。2025年は業平の生誕1200年に当たります。この物語は美術とも関連があり、絵巻や工芸には伊勢物語を題材にした作品が残されています。この機会に伊勢物語を取り上げます。その美術とともに物語の魅力について解説します。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
展覧会でさまざまな作品を観てください。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
レポート			70		
平常の授業態度			30		
教科書情報					
教科書1	使用しません。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『伊勢物語 造形表現集成』				
出版社名	角川学芸出版	著者名	河田昌之 赤澤真理 大口裕子 伊永陽子 編		
参考書名2	『伊勢物語絵巻絵本大成』				
出版社名	思文閣出版	著者名	羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会		
参考書名3	特別展図録『伊勢物語 雅と恋のかたち』2007年				
出版社名	和泉市久保惣記念美術館	著者名	和泉市久保惣記念美術館		
参考書名4	『宗達 伊勢物語図色紙』				
出版社名	思文閣出版	著者名	羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語絵研究会		
参考書名5	『伊勢物語全読解』				
出版社名	和泉書院	著者名	片桐洋一		
参考 URL					



特記事項	
教員実務経験	
登録博物館の学芸員として、約 40 年間に展覧会の企画や美術品の収集、保管、展示等の実務にあたり、そのうちの約 10 年間は館長として組織運営や対外的な交流などの美術館マネジメント分野にも携わる。展覧会の企画や開催の実務、海外での作品調査の経験も多い。著書、論文が複数ある。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	伊勢物語絵について 1(平安～江戸時代 絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風)
2	伊勢物語絵について 2(平安～江戸時代 絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風)
3	伊勢物語絵作例 1 (久保惣美術館本 1)
4	伊勢物語絵作例 1 (久保惣美術館本 2)
5	伊勢物語絵作例 2 (小野本 1)
6	伊勢物語絵作例 2 (小野本 2)
7	伊勢物語絵作例 3 (スペンサーコレクション本)
8	伊勢物語絵作例 4 (嵯峨本)
9	伊勢物語絵作例 5(宗達色紙)
10	伊勢物語絵作例 6 (光琳、乾山の作品)
11	伊勢物語絵作例 7(住吉如慶筆「伊勢物語絵巻」)
12	徒然草の絵画(徒然草図の流れ)
13	徒然草図の作例 1(住吉派 1)
14	徒然草図の作例 2(住吉派 2)
15	まとめ 流派による物語理解や表現

科目名	音楽芸術学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	田之頭 一知				
クラス名					
授業目的と到達目標					
音楽を学問的に研究することの意義を明らかにすることを目的とし、音楽を論理的に考察し、それを文章化することを目標とする。					
授業概要					
音楽を音楽として扱うことが、音楽を学問的に研究する場合に必要な態度である。しかし、それはいったいどのようなことなのか。本講義では音楽学、なかんずく、音楽美学あるいは音楽哲学と呼ばれる学問領域に根差しつつ、音楽の本質あるいは原理的基盤に関して、具体的な作品に即しつつ講義を進めてゆく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
西洋において音楽は古来、学問的なものとみなされてきた。それが何を意味するのかを各自で考えてもらいたい。なお、授業計画に関しては、必要に応じて変更することがあるので、注意すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	必要があれば、授業中に指示する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	第1部: ロマン派のピアノ音楽をめぐって
2	ショパンの場合①
3	ショパンの場合②
4	シューマンの場合①
5	シューマンの場合②
6	リストの場合①
7	リストの場合②
8	第2部: 交響曲と交響詩をめぐって
9	ブラームスの場合
10	ブルックナーの場合
11	リストの場合
12	第3部: 音楽とその隣人
13	音楽と映画——武満徹の場合
14	音楽と舞踊——イサドラ・ダンカンとマーサ・グレアムの場合
15	総括と今後の展望

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	石井 元章				
クラス名					
授業目的と到達目標					
本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。					
授業概要					
学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。 授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
自らの論文執筆のために、先行研究をしっかりと読んで、構成や文章表現を勉強すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			100%		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。				

2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	

科目名	芸術学研究演習	年次	2	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	石井 元章				
クラス名					
授業目的と到達目標					
本演習は美術史の学位論文研究遂行に必要な能力の涵養を目指す。					
授業概要					
学生の必要に応じて論文執筆を推進する指導を行なう。先行研究論文を輪読し、学術論文における日本語表現の陶冶を目指す。 授業内容は参加者を考慮しながら、適宜変更する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
自らの論文執筆のために、先行研究をしっかりと読んで、構成や文章表現を勉強すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			100%		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。				

2	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
3	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
4	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
5	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
6	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
7	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
8	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
9	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
10	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
11	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
12	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
13	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
14	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	
15	具体的に論文を指導し、必要に応じて読むべき先行研究論文の指示を行なう。	

科目名	工芸特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	舘 正明				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>染織には布を染める「染め」と、糸を織る「織り」がある。多くの場合、そのどちらにも染色の工程が介在しているが、染色は染めるだけでは成立しない。その対極にある染めない部分をいかに作るかが重要であり、これを防染と言う。防染を行うには様々なプロセス、素材や技法を必要とする。この授業では素材や技法との対話やプロセスで生まれる新しい染色表現の探求を目的とし、染色分野の理解と各自の専門分野への新しいアプローチの発見が目標である。</p>					
授業概要					
<p>防染に用いられる素材の代表である糊に注目し、それぞれの特性や技法などを演習によって体験し、各自の作品へ展開する。 また、現代の染織作品や染織界の動向などについて適宜、資料などで紹介する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>身の回りに溢れる染織品に目を向け、染織分野と人との密接さを感じて欲しい。新しいもの、古いもの、専門分野の枠にとらわれず美術館、ギャラリーへ出向き、視野を広げること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出課題・作品			70		
プレゼンテーション			30		
教科書情報					
教科書1	適宜資料等を配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	染を学ぶ				
出版社名	角川書店	著者名	福本繁樹・柳楽剛・舘正明他		
参考書名2	21世紀は工芸がおもしろい				
出版社名	求龍堂	著者名	福本繁樹編著		
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
{舘 正明 HP, <a href="https://tatemasaaki.jimdofree.com/">https://tatemasaaki.jimdofree.com/</a> }					
特記事項					



教員実務経験	
染色家の教員が制作、発表で得た知見を生かし染色表現の技法について指導する。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	糊による防染を考える1 講義 型染めについて
2	糊による防染を考える2 糊置き
3	糊による防染を考える3 地入れ 技法研究2-1 筒描き 試作・デザイン
4	糊による防染を考える4 染色
5	糊による防染を考える5 染料定着、糊落し
6	技法研究2-2 筒描き 糊置き
7	技法研究2-3 筒描き 染色
8	技法研究2-4 筒描き 仕上げ 糊落し・水元
9	合評防染による染色布の制作1 染色作品制作に向けての計画発表
10	防染による染色布の制作2 各自の計画により制作を進める
11	防染による染色布の制作3 各自の計画により制作を進める
12	防染による染色布の制作4 各自の計画により制作を進める
13	防染による染色布の制作5 各自の計画により制作を進める
14	防染による染色布の制作6 各自の計画により制作を進める
15	プレゼンテーション・合評

科目名	デザイン特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	大平 弘				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>ビジュアルコミュニケーションを目的としたグラフィックデザインは、メディア・社会環境によって手法や技術が変化します。各自の研究課題を基本におき、完成度の高い作品制作を目的にします。感覚的造形表現(独自性)とビジュアルコミュニケーションの関係を考察し、計画的な考え方やアイデアを探り、豊かな感性と個性で表現するグラフィックデザイナー・イラストレーターの育成を目標にします。</p>					
授業概要					
<p>題材／『本の形』展 2          ③展示計画／後期          ④サイン計画          ⑤冊子制作          『本の形』展 2 は客観的視点が必要になります。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>各自の研究分野をもとに授業の組み立てをします。制作は各自の感覚的表現から始まるものですが、その視野を広げることは制作を続けるためにとっても大切です。美術を含む他造形表現、画材、材料、技法にめくぼり表現の幅を広げるように心がけてください。さらに、多くの展覧会に足を運び、展示方法・会場風景も観察の対象としてください。合わせて「展覧会」に関わるポスター・チラシ、ダイレクトメール、冊子などを収集しておいてください。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
受講態度・積極的研究参加			50		
制作課題による評価			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名			著者名		
教科書2					
出版社名			著者名		
教科書3					
出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
グラフィックデザインの実務と造形作家としての視点から、作品制作の方法や視覚伝達の技術を指導する。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>●課題説明</li> <li>① 課題_展示計画(入口看板・サイン計画含む)</li> <li>② 課題_会場配布用_冊子の制作</li> </ul>
2	資料収集_見つける・調べる 空間の確認(指定教室の実寸確認)、冊子資料収集
3	冊子の試作_検討 サイズと形態、紙・素材の検討
4	冊子の試作_検討・深める レイアウト案の作成
5	冊子の試作_改良・考えをまとめる レイアウトの確認／●実寸サイズの試作プレゼンテーション
6	作品制作(報告)
7	作品制作(報告)
8	作品制作(報告)
9	完成作品制作(報告_検討、●中間プレゼンテーション)
10	完成作品制作(報告_改善)
11	●冊子の完成／プレゼンテーション／合評
12	提案_展示計画
13	検討_展示計画
14	改善_展示計画
15	<ul style="list-style-type: none"> <li>●プレゼンテーション</li> <li>① 課題_『本の形』展出品作品制作</li> <li>② 課題_B2 サイズ展覧会告知ポスター</li> <li>③ 課題_ロゴタイプの制作</li> <li>④ 課題_展示計画(入口看板・サイン計画含む)</li> <li>⑤ 課題_会場配布用冊子①～⑤を A4 ファイルにまとめ提出</li> </ul>

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	団野 恵美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。					
授業概要					
対面授業学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題提出			70		
授業内発表			30		
教科書情報					
教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する				
出版社名			著者名		
教科書2					
出版社名			著者名		
教科書3					
出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1					
出版社名			著者名		
参考書名2					
出版社名			著者名		
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	前期提出の論文について返却と講評				

2	新しい視点と調査について	
3	論文を仕上げるまでの計画	
4	論文執筆しながらの研究について	
5	論文チェックと指導	
6	論文チェックと指導	
7	論文チェックと指導	
8	論文チェックと指導	
9	論文チェックと指導	
10	論文チェックと指導	
11	論文チェックと指導	
12	授業内で論文発表	
13	論文チェックと指導	
14	論文最終チェック	
15	後期の論文提出	

科目名	音楽学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。					
授業概要					
論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
好奇心を発揮して、積極的に読んだり書いたり話したりすること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業中課題(提出物、レポート)			30%		
参加度			20%		
授業中発表			20%		
期末レポート			30%		
教科書情報					
教科書1	『論文ゼミナール』				
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				

1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	副論文を書くには
13	引用と文章のマナー
14	発表の形態
15	総括

科目名	音楽学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
論文の書き方を学ぶ。音楽について書かれたものを読み、考え、書くというステップを通じて、自分が音楽のどのような側面に興味があるのかを明確にしていくことをめざす。					
授業概要					
論文を書くための基本的な考え方と方法を学ぶ。論文を真に有意義なものとするためには、自分が本当に興味の持てるテーマに出会うことが大切である。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
好奇心を発揮して、積極的に読んだり書いたり話したりすること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業中課題(提出物、レポート)			30%		
参加度			20%		
授業中発表			20%		
期末レポート			30%		
教科書情報					
教科書1	『論文ゼミナール』				
出版社名	東京大学出版会、2014	著者名	佐々木健一		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				



1	導入
2	音楽について書くこと
3	テーマの考え方
4	主な音楽事典
5	文献を探す
6	インターネットを活用する
7	図書館を使う
8	楽譜を選ぶ
9	分析を考える
10	論の組み立て
11	学術的な文章とは
12	副論文を書くには
13	引用と文章のマナー
14	発表の形態
15	総括

科目名	作曲特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	志村 哲				
クラス名					

#### 授業目的と到達目標

注:本科目は、前期開講の同名の科目と連続で履修することが求められますので、参考文献等は、同名の前期開講科目の授業内容を参照してください。

古代から継承される日本の伝統音楽と、今日の日本楽器を用いた種々の作品および、電気・電子技術、コンピュータ等を利用した音楽創作を中心に、音楽創造における多種多様な音楽制作の手法を、日本の伝統技術という枠組みから考察する。

また、音響・映像機器、新世代楽器、IT との関わりについても考察する。

洋の東西を問わず、あらゆる楽器において、音楽と楽器（道具）との関わりを実践的に追究するアプローチの方法を学ぶ。

また「美術と音楽」「建築と音楽」「映像と音楽」「文学と音楽」など、音楽以外の領域の履修者の専門領域との関わりについて考察する。

他領域からの音楽文化への眼差しを重視し、あるいは、諸領域への音楽学の応用方法を検討するためのディスカッションの機会を設定する。

#### 授業概要

注:本科目は、前期開講の同名の科目と連続で履修することが求められますので、授業内容は前期開講科目のシラバスを参照してください。

前半は日本音楽における歴史的な作品をテーマに、記譜法、楽器と奏法、演奏の場（社会）等の諸側面から特徴を考察する。次に日本の音楽界の現状を扱い、作曲家、演奏家、聴衆等について多角的に検討する。その後、受講生各自の研究課題に関わり、現代の日本音楽、国際的に様々な音楽種目に用いられる日本楽器の様相、メディア、コンピュータとの結び付き、ポピュラー音楽等から幾つかの事例を取り上げる。

音楽領域に留まるのではなく、他領域の受講生の参加を強く求め、芸術・文化・社会について多角的に議論したい。

#### 準備学修(予習・復習)・受講上の注意

文化的な側面において急速に国際化の進む時代であるからこそ、日本音楽に関して、歴史と音楽の種類、文化的、地域的背景の理解に努めるとともに、日常的に好奇心を高めること。

#### 成績評価方法・基準

種別	割合(%)
授業に取り組む姿勢	40
研究発表	30
最終課題	30

#### 教科書情報

教科書1		
出版社名		著者名
教科書2		
出版社名		著者名
教科書3		
出版社名		著者名

#### 参考書情報

参考書名1		
出版社名		著者名
参考書名2		
出版社名		著者名

参考書名3		
出版社名		著者名
参考書名4		
出版社名		著者名
参考書名5		
出版社名		著者名
参考 URL		
特記事項		
教員実務経験		
<p>本科目の参考書の執筆者であり、他にも学術書、レコード解説等を多数執筆している。日本楽器「尺八」の音楽学／楽器学的研究で、博士(学術)の学位を取得した。また、コンピュータ音楽の創作(国際コンピュータ音楽会議に2回入選を含む)、尺八演奏家(国際尺八フェスティバルでは毎回、招待演奏家として出演)等、テクノロジーと日本伝統音楽を融合させるアーティストとして活躍しているので、音に留まらず、音楽と他の芸術との接点や、創作におけるものの考え方の共通性、個別性についての議論ができる。</p>		
授業計画(各回予定)		
授業回	授業内容	
1	本科目は、前期開講の同名の科目と連続で履修することが求められますので、授業内容は「2025年度 前期」の16～30に、「2025年度 後期」分が連なって記載されています。そこで「2025年度 前期」の内容を参照してください。	
2	同上	
3	同上	
4	同上	
5	同上	
6	同上	
7	同上	
8	同上	
9	同上	
10	同上	
11	同上	
12	同上	
13	同上	
14	同上	
15	同上	

科目名	デザイン特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	石津 勝				
クラス名	大学院				
授業目的と到達目標					
<p>これからの空間(場)に於ける重要なファクター(要素・要因)を受講者自らが抽出し、そのファクターの「あるべきデザイン論」によって導かれる創造性と独創性を併せ持った空間(場)を提案し、そのデザインプロセスを通して、既成概念に囚われない新たな空間デザイン創出の作法を学ぶ。</p>					
授業概要					
<p>対面授業提案する空間(場)の内容(インテリア系や空間演出系など)や表現方法は自由とし、受講者自らの研究課題の確立に役立つことを最優先とする。受講者が望めば研究課題の発表の場も設ける。また、関連した類似コンペ等があれば、それらに応募することも推奨する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>課題制作の内容については教員の確認をとること。適時プリントを配布するので、事前に必要な予習を行い、必要な準備物も用意すること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出された課題作品及び主体的な授業参加を総合的に評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

空間デザイナーである教員が、多数の展示設計の実務経験を活かし、実践的な場面を想定した展示デザインに関わる指導を行う。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	課題のテーマ設定／課題設定のための調査・分析
2	設定テーマの調査・分析から企画・構想(6W2H)
3	企画・構想(アイデアからデザインの方向性決定)
4	表現内容のシナリオ設定
5	シナリオからコンセプトワーク
6	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
7	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
8	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
9	表現内容(提出課題)作成
10	表現内容(提出課題)作成
11	表現内容(提出課題)作成
12	表現内容(提出課題)作成
13	表現内容(提出課題)ブラッシュアップ
14	表現内容(提出課題)提出
15	講評／授業のまとめ

科目名	デザイン特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	石津 勝				
クラス名	大学院				
授業目的と到達目標					
<p>これからの空間(場)に於ける重要なファクター(要素・要因)を受講者自らが抽出し、そのファクターの「あるべきデザイン論」によって導かれる自身の創造性と独創性を伴う空間(場)を提案し、そのデザインプロセスを通して、既成概念に囚われない新たな空間デザイン創出の作法を学ぶ。また自身の研究へ役立てることを意識し他領域や異分野への視野も獲得する。</p>					
授業概要					
<p>対面授業提案する空間(場)の内容(インテリア系や空間演出系など)や表現方法は自由とし、受講者自らの研究課題の確立に役立つことを最優先とする。受講者が望めば研究課題の発表の場も設ける。また、関連した類似コンペ等があれば、それらに応募することも推奨する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>課題制作の内容については教員の確認をとること。適時プリントを配布するので、事前に必要な予習を行い、必要な準備物も用意すること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出された課題作品及び主体的な授業参加を総合的に評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

空間デザイナーである教員が、多数の展示設計の実務経験を活かし、実践的な場面を想定した展示デザインに関わる指導を行う。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	課題のテーマ設定／課題設定のための調査・分析
2	設定テーマの調査・分析から企画・構想(6W2H)
3	企画・構想(アイデアからデザインの方向性決定)
4	表現内容のシナリオ設定
5	シナリオからコンセプトワーク
6	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
7	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
8	コンセプトに沿った計画・設計(PDCAサイクル)
9	表現内容(提出課題)作成
10	表現内容(提出課題)作成
11	表現内容(提出課題)作成
12	表現内容(提出課題)作成
13	表現内容(提出課題)ブラッシュアップ
14	表現内容(提出課題)提出 ※受講者の希望があれば発表の場を設定
15	講評／授業のまとめ

科目名	絵画特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	森井 宏青				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>授業目的: 私達が無自覚のうちに飲まれゆく、世界の価値観の均質化。グローバリズム。その問題に対しアートは、マテリアルはどう関わるのか。</p> <p>表現により自己を確立するうえで、知らねばならない様々な古典技法や素材。基礎知識の習得と演習。</p> <p>達成目標: 広くアートを構成しうる材料に興味を持ち、自己表現との深い関わりを見出し築くことにより、アイデンティティを獲得する。素材の可能性と表現のかかわりを、0ベースで検証実験する。</p>					
授業概要					
「画材とは何か、自己の表現とどうつながるか」を中心とした専門理論の講義。または実際にそれらを活用しての演習。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>アートを構成する、まさに「基底材」となりうる知識の習得が主旨である。なるべく難しい言葉を使わず、興味持てる内容になるよう授業構成しているが、ノートを取らない、居眠りや欠席が多いなど、勤勉さに欠ける学生には受講を認めない。</p> <p>また、各自で収集、作成するなど、自ら行動する積極性が求められる。</p> <p>大学院生に恥じない、自覚ある受講態度で臨むこと。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業態度、姿勢、質疑応答や、演習の結果による総合判定。理論、知識が豊かに、正確に習得されているか、それらが演習としてのびやかに創作に生かされているか			100%		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			



参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
<p>森井 宏青 :画家 美術学科においては油画コース(具象)3・4 回生を担当          幼少期からのエドワルト・ムンクへの関心から画家を志し、ノルウェー・フィンランド等北欧を中心に個展活動を展開する。          本授業では画家としてのみならず、古典技法、絵画材料研究、絵画修復、北欧美術研究など、豊富な知識・経験を生かし、講義、実習の両面により指導する。また、日本の現代作家として、国際的な見地に立った活動の必要性について解説する。</p>	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	講義1:各学生のアトリエ訪問から、表現とマテリアルの関わりについて検証する
2	講義2:表現による自己確立とグローバリズム
3	講義3: 支持体とは
4	講義4:有機顔料と無機顔料
5	講義5:白の考察
6	演習1: 独自の支持体を見出すために。油彩画のための理想的支持層とは
7	演習2: 油彩支持体制作①
8	演習3: 油彩支持体制作②
9	演習4: 油彩支持体制作③
10	演習5 独自の支持体を作成する①
11	演習6 独自の支持体を作成する②
12	演習7 独自の支持体を作成する③
13	演習8 独自の支持体を作成する④
14	演習9 独自の支持体を作成する⑤
15	フリーディスカッション

科目名	音楽学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>ヘンデルのオラトリオ《メサイア》を考える。《メサイア》は、数あるオラトリオ作品の中でも長年、世界の様々な場所で継続的に歌われてきている点で突出した存在である。この《メサイア》の演奏史を、イギリスから始めて、アメリカ、日本へと視野を広げて展望する。多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考えることで、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。</p>					
授業概要					
<p>前期では、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》の演奏史を考える。イギリスを始めとする諸国で、誰によって、どこで、どのように歌われてきたのかを、アメリカや日本を含めて考察する。後期では、多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考えることで、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと(週 90 分程度)。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業態度			30%		
授業内発表 および ミニ・レポート			20		
中間・期末レポート			50%		
教科書情報					
教科書1	『ヘンデル:メサイア HWV 56』ペーレンライター社、新ヘンデル全集版、小型スコアが望ましいが、他の版が手元にあればそれでも可(ヴォーカル・スコアではなくオーケストラ譜付きのものを用意すること)				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『メサイア—理解と演奏のためのスタディガイド』				
出版社名	パナムジカ、2019	著者名	ヘルムート・リリング、菅野弘久他訳		
参考書名2	『ヘンデル:創造のダイナミズム』				
出版社名	春秋社、2009	著者名	ドナルド・パロウズ編、藤江効子、小林裕子、三ヶ尻正訳		
参考書名3	『メサイアは何を歌うのか』				
出版社名	聖公会出版、2008	著者名	家田足穂		
参考書名4	Handel, Messiah(Cambridge music handbooks)				
出版社名	Cambridge U.P., 1991	著者名	Donald Burrows		
参考書名5	『ヘンデル』				
出版社名	東京書籍、1991	著者名	クリストファー・ホグウッド著、三澤寿喜訳		

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	オラトリオとは何か
3	ヘンデルのオラトリオ作品
4	《メサイア》の成立とダブリン初演
5	《メサイア》のロンドン初演
6	捨て子養育院での《メサイア》演奏
7	ヘンデル記念祭と《メサイア》
8	18 世紀の《メサイア》演奏
9	19 世紀の《メサイア》演奏
10	アメリカの《メサイア》演奏
11	日本の《メサイア》演奏:本邦初演
12	日本の《メサイア》演奏:関西の場合
13	日本の《メサイア》演奏:関東の場合
14	日本の《メサイア》演奏:現状と課題
15	総括

科目名	音楽学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	津上 智実				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>ヘンデルのオラトリオ《メサイア》を考える。《メサイア》は、数あるオラトリオ作品の中でも長年、世界の様々な場所で継続的に歌われてきている点で突出した存在である。この《メサイア》の演奏史を、イギリスから始めて、アメリカ、日本へと視野を広げて展望する。多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考えることで、音楽作品とは何か、作品の演奏とはどのような可能性を持っているのかについての理解を深める。</p>					
授業概要					
<p>後期では、ヘンデルのオラトリオ《メサイア》が多くの団体によって定期的・継続的に演奏され続けてきた要因を、《メサイア》の歌詞と楽曲の構造に遡って考える。後期では、イギリスを始めとする諸国で、誰によって、どこで、どのように歌われてきたのかを、アメリカや日本を含めて考察する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
よく聴く、よく読む、よく考える。折々に小さな課題を出すので、主体的に積極的に取り組むこと(週 90 分程度)。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業態度			30%		
議論への参加度			20		
中間・期末レポート			50%		
教科書情報					
教科書1	『ヘンデル:メサイア HWV 56』ベーレンライター社、新ヘンデル全集版、小型スコアが望ましいが、別の版が手元にあればそれでも可(ヴォーカル・スコアではなくオーケストラ譜付きのものを用意すること)				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『ヘンデル』				
出版社名	東京書籍、1991	著者名	クリストファー・ホグウッド著、三澤寿喜訳		
参考書名2	『ヘンデル:創造のダイナミズム』				
出版社名	春秋社、2009	著者名	ドナルド・パロウズ編、藤江効子、小林裕子、三ヶ尻正訳		
参考書名3	Handel, Messiah (Cambridge music handbooks)				
出版社名	Cambridge U.P., 1991	著者名	Donald Burrows		
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	導入
2	オラトリオのテキスト
3	《メサイア》の台本作者と時代背景
4	オラトリオの音楽構造
5	《メサイア》の基本的な音楽構造
6	《メサイア》のレチタティーヴォ
7	《メサイア》のアリア
8	《メサイア》の合唱
9	〈ハレルヤ〉の優位性
10	《メサイア》演奏の問題点
11	《メサイア》演奏の実際的な工夫
12	《メサイア》演奏の現状
13	《メサイア》演奏の今後
14	《メサイア》にみる作品と演奏の可能性
15	総括

科目名	彫刻特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	田丸 稔				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>修了研究へ向けて、自らの彫刻的課題と関心に基づき、特に参考にするべき既成作家もしくは先行研究の作品を取り上げ、自らの表現に反映するための考察、試作を行い、修了研究の目的、到達目標を明確化する。</p>					
授業概要					
<p>創作の指標となる作家研究を通じて、制作の有り様を理解することを試みた上で新たに作品の試作を行い、彫刻観、制作観を構築を試みる。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>授業時間外は 1 週間12 時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。 研究不正防止の観点から研究倫理(研究活動における不正行為:捏造、改ざん、盗用、研究データの管理など)に関する事留意すること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価			50%		
学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価			0.5		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	彫刻とは何か 新装版: 特質と限界				
出版社名	日貿出版	著者名	ハーバート・リード/宇佐美英治 訳		
参考書名2	近代彫刻史				
出版社名	言叢社	著者名	ハーバート・リード/藤原えりみ 訳		
参考書名3	芸術の意味				
出版社名	みすず書房	著者名	ハーバート・リード/滝口修造 訳		
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

彫刻家として、また芸術系大学で制作研究および教育活動を行ってきた経験を活かし、彫刻造形指導及び創作理念を指導する。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	実制作およびレポート作成
3	実制作およびレポート作成
4	実制作およびレポート作成
5	実制作およびレポート作成
6	実制作およびレポート作成
7	実制作およびレポート作成
8	実制作およびレポート作成
9	実制作およびレポート作成
10	実制作およびレポート作成
11	実制作およびレポート作成
12	実制作およびレポート作成
13	実制作およびレポート作成
14	実制作およびレポート作成
15	まとめ

科目名	彫刻特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	田丸 稔				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>修了研究へ向けて、自らの彫刻的課題と関心に基づき、特に参考にするべき既成作家もしくは先行研究の作品を取り上げ、自らの表現に反映するための考察、試作を行い、修了研究の目的、到達目標を明確化する。</p>					
授業概要					
<p>前期に引き続き、創作の指標となる作家研究を通じて、制作の有り様を理解することを試みた上で新たに作品の試作を行い、彫刻観、制作観を構築を試みる。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>授業時間外は 1 週間12 時間以上、自己の制作研究に集中し、理論的考察を試みる。 研究不正防止の観点から研究倫理(研究活動における不正行為:捏造、改ざん、盗用、研究データの管理など)に関する事留意すること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
研究レポートおよびゼミナール形式の研究会における発表の状況に関する評価			50%		
学内外での研究発表(個展および展覧会等への出品)の状況についての評価			50		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	彫刻とは何か 新装版: 特質と限界				
出版社名	日貿出版	著者名	ハーバート・リード/宇佐美英治 訳		
参考書名2	近代彫刻史				
出版社名	言叢社	著者名	ハーバート・リード/藤原えりみ 訳		
参考書名3	芸術の意味				
出版社名	みすず書房	著者名	ハーバート・リード/滝口修造 訳		
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					



彫刻家として、また芸術系大学で制作研究および教育活動を行ってきた経験を活かし、彫刻造形指導及び創作理念を指導する。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	実制作およびレポート作成
3	実制作およびレポート作成
4	実制作およびレポート作成
5	実制作およびレポート作成
6	実制作およびレポート作成
7	実制作およびレポート作成
8	実制作およびレポート作成
9	実制作およびレポート作成
10	実制作およびレポート作成
11	実制作およびレポート作成
12	実制作およびレポート作成
13	実制作およびレポート作成
14	実制作およびレポート作成
15	まとめ

科目名	美術史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	石井 元章				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神の国際的視野に立って、本講義は美術史学研究に必要な基礎知識を習得することを目的とし、後期はヴェネツィア美術に関する文献を講読する。					
授業概要					
サルヴァトーレ・セツティス『絵画の発明』晶文社、2002 ローナ・ゴッフェン『ヴェネツィアのパトロネージ』三元社、2009 デイヴィッド・ローザンド『ヴェネツィア神話』三元社、2024 を輪読し、ヴェネツィア・ルネサンス美術に関する理解を深める。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
著作を読みながら、ヴェネツィア美術に関する理解と知識を深める。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			50%		
発表、レポート			50		
教科書情報					
教科書1	西洋美術の歴史 4 ルネサンスI				
出版社名	中央公論新社	著者名	小佐野重利他		
教科書2	絵画の発明: ジョルジョーネ「嵐」解説				
出版社名	晶文社	著者名	サルヴァトーレ・セツティス		
教科書3	ヴェネツィアのパトロネージ ベッリーニ、ティツィアーノの絵画とフランチェスコ修道会				
出版社名	三元社	著者名	ローナ・ゴッフェン		
参考書情報					
参考書名1	西洋美術解説事典				
出版社名	河出書房新社	著者名	ジェイムズ・ホール		
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	『絵画の発明』解説
2	『絵画の発明』第一章
3	『絵画の発明』第二章
4	『絵画の発明』第三章
5	『絵画の発明』第四章
6	『絵画の発明』第五章
7	『ヴェネツィア神話』序説
8	『ヴェネツィア神話』第一章
9	『ヴェネツィア神話』第二章
10	『ヴェネツィア神話』第三章
11	『ヴェネツィア神話』第四章
12	『ヴェネツィア神話』第五章
13	『ヴェネツィアのパトロネージ ベッリーニ、ティツィアーノの絵画とフランチェスコ修道会』 第一章 第二章
14	『ヴェネツィアのパトロネージ ベッリーニ、ティツィアーノの絵画とフランチェスコ修道会』 第三章 第四章
15	『ヴェネツィアのパトロネージ ベッリーニ、ティツィアーノの絵画とフランチェスコ修道会』 第五章 補講 1, 2 レポート提出

科目名	工芸特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	三木 陽子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>やきものの制作プロセスを通じて、必要とされる基礎的知識と技法を、実際の制作を通じて習得する。  また古代から人の生活を支え、芸術や文化を担ってきた歴史あるやきものに触れることにより、受講生が新たな視点を獲得し、自身の研究を深めることを目指す。</p>					
授業概要					
<p>前期: 代表的な 3 種の技法、手びねり技法、タタラ技法、鑄込み技法を用いた基礎的な課題を行うことで、素材への理解を深め、体感する。  後期: 前期で学んだ技法を用い、自身の研究と関連する作品を制作する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>やきものの要となる焼成に向けて、受講生全員の制作進行を合わせなければならない為、できるだけ出席すること。  受講中は制作に適した服装で臨んでください。</p>					
成績評価方法・基準					
種別	割合(%)				
作品	70				
授業に取り組む姿勢	30				
教科書情報					
教科書 1					
出版社名		著者名			
教科書 2					
出版社名		著者名			
教科書 3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名 1					
出版社名		著者名			
参考書名 2					
出版社名		著者名			
参考書名 3					
出版社名		著者名			
参考書名 4					
出版社名		著者名			
参考書名 5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
{担当教員: 三木陽子 website, <a href="http://www.mikiyoko.com">http://www.mikiyoko.com</a> }					
特記事項					
シラバスについて:					

履修者の人数や経験や状況に応じ、内容が一部変更になる可能性があります。	
教員実務経験	
陶芸作家・造形作家としての活動や経験を活かした指導を行う。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業概要、陶磁器制作プロセス説明 講義:教員(三木陽子)研究プレゼンテーション(自作について)
2	触覚体験:土練り、掌中のオブジェ制作(講義と実習)
3	受講生による研究プレゼンテーション(人数により回数変更有り)
4	受講生による研究プレゼンテーション(人数により回数変更有り)
5	制作 A「筒型を基本とした造形」 手びねり技法による制作
6	制作 A「筒型を基本とした造形」 触覚による加飾・仕上げ→乾燥
7	制作 B:「箱型を基本とした造形」 タタラ板を利用した粘土板制作・型紙制作
8	制作 B:「箱型を基本とした造形」 粘土板組み立て
9	制作 B:「箱型を基本とした造形」 仕上げ→乾燥
10	制作 C:1 面型による鑄込み成形 原型制作
11	制作 C:1 面型による鑄込み成形 原型制作→石膏型制作
12	制作 C:1 面型による鑄込み成形 ・石膏型制作・制作 A.B:素焼き(窯詰め)
13	制作 C:1 面型による鑄込み成形 石膏型の仕上げ(鑄込みは後期) ・制作 A.B:素焼き(窯出し)
14	制作 A.B:釉掛け 本焼成窯詰め
15	本焼成窯出し・講評

科目名	工芸特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	三木 陽子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>やきものの制作プロセスを通じて、必要とされる基礎的知識と技法を、実際の制作を通じて習得する。  また古代から人の生活を支え、芸術や文化を担ってきた歴史あるやきものに触れることにより、受講生が新たな視点を獲得し、自身の研究を深めることを目指す。</p>					
授業概要					
<p>前期: 代表的な 3 種の技法、手びねり技法、タタラ技法、鑄込み技法を用いた基礎的な課題を行うことで、素材への理解を深め、体感する。  後期: 前期で学んだ技法を用い、自身の研究と関連する作品を制作する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>やきものの要となる焼成に向けて、受講生全員の制作進行を合わせなければならない為、できるだけ出席すること。  受講中は制作に適した服装で臨んでください。</p>					
成績評価方法・基準					
種別	割合(%)				
作品	70				
授業に取り組む姿勢	30				
教科書情報					
教科書 1					
出版社名		著者名			
教科書 2					
出版社名		著者名			
教科書 3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名 1					
出版社名		著者名			
参考書名 2					
出版社名		著者名			
参考書名 3					
出版社名		著者名			
参考書名 4					
出版社名		著者名			
参考書名 5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
{担当教員: 三木陽子 website, <a href="http://www.mikiyoko.com">http://www.mikiyoko.com</a> }					
特記事項					
シラバスについて:					

履修者の人数や経験や状況に応じ、内容が一部変更になる可能性があります。	
教員実務経験	
陶芸作家・造形作家としての活動や経験を活かした指導を行う。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	講義:「現代の陶芸」
2	・鑄込み成形の続き ・最終課題のプランニング
3	・鑄込み成形の続き ・最終課題のプランニング
4	・鑄込み成形の仕上げ ・最終課題のプランニング
5	・最終課題のプランニング ・成形開始
6	最終課題の成形
7	最終課題の成形
8	最終課題の成形と仕上げ
9	窯詰め(素焼き)
10	・窯出し ・加飾
11	加飾
12	施釉
13	窯詰め(本焼き)
14	窯出し
15	講評会

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テキストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。</p>					
授業概要					
<p>個々のテーマや項目に関する文献資料(研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等)の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名			著者名		
教科書2					
出版社名			著者名		
教科書3					
出版社名			著者名		
参考書情報					
参考書名1	レポート・論文の書き方入門(第4版)				
出版社名	慶應義塾大学出版会		著者名	河野哲也	
参考書名2	情報生産者になる(ちくま新書)				
出版社名	筑摩書房		著者名	上野千鶴子	
参考書名3					
出版社名			著者名		
参考書名4					
出版社名			著者名		
参考書名5					
出版社名			著者名		
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					



授業回	授業内容
1	導入: 研究テーマの設定、文献・資料の収集、先行研究の検討と方法論の確認
2	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討①
3	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討②
4	研究テーマに関連する文献の調査と先行研究の検討③
5	資料収集と先行研究の検討①
6	資料収集と先行研究の検討②
7	資料収集と先行研究の検討③
8	資料収集と先行研究の検討④
9	文献紹介と研究報告①
10	文献紹介と研究報告②
11	文献紹介と研究報告③
12	文献紹介と研究報告④
13	前期レポート作成①
14	前期レポート作成②
15	前期の振り返りとまとめ

科目名	芸術学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>芸術学の基本的な研究方法を学ぶ。各々の研究テーマを設定し、資料の扱い方、テキストの読解、議論の整理の仕方を習得していく。各自が修士論文を作成・完成することを到達目標とする。この授業を通じて、「建学の精神」にもどづいて定められた大学院の「教育目的」にあるように、美及び芸術における理論研究の能力を錬磨する。</p>					
授業概要					
<p>個々のテーマや項目に関する文献資料(研究書、雑誌論文、辞書項目、インターネット検索等)の調べ方、整理方法、まとめ方を習得する。最終的にはその成果を文章化し、提示するプレゼンテーションの手法を身につけることをめざす。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各自のテーマに沿った文献調査を予め行っておくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	レポート・論文の書き方入門(第4版)				
出版社名	慶應義塾大学出版会	著者名	河野哲也		
参考書名2	情報生産者になる(ちくま新書)				
出版社名	筑摩書房	著者名	上野千鶴子		
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	後期への再導入。文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化①
2	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化②
3	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化③
4	文献・資料調査の続行、研究発表による問題点の明確化④
5	研究報告とディスカッション①
6	研究報告とディスカッション②
7	研究報告とディスカッション③
8	研究報告とディスカッション④
9	研究報告と課題の検討①
10	研究報告と課題の検討②
11	研究報告と課題の検討③
12	研究報告と課題の検討④
13	研究成果のまとめ①
14	研究成果のまとめ②
15	全体の振り返り

科目名	演奏特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	阪本 朋子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
①想起した音(音の表情)をただちに声や楽器で実践できる能力を身につける ②自らの演奏(作品)の魅力を認識し、自己実現に至るプロセス(練習を含む)を構築する能力を身につける ③演奏する現場において、音楽は絶えず流動的である。臨機応変な対応力を身につける ④オペラの舞台作りに関わるコレペティとしての基礎能力を身につける ⑤ピアノのコードネーム奏法・アレンジメント奏法を身につける					
授業概要					
・受講生全員参加型対面授業の予定(絶えずディスカッションできる環境を提唱します) ・常に即実践の姿勢で自らのパフォーマンスを磨く場と考えてください。毎回「パフォーマンス課題」を提示します ・作品への共感をいかに伝えるか、自己表現の挑戦と工夫を絶えず繰り返す場とします					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
・毎回提示する「パフォーマンス課題」を予習、復習において徹底研究してください。 ・受講に際しては、自らが研究したい楽曲の楽譜は必要部数を準備して授業に臨んでください。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
成果発表パフォーマンス 100%					
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
動きやすい服装での参加を提示することがあります					

教員実務経験

オペラの舞台作り欠かせないコレペティ(オペラ歌手の下稽古)の経験を活かして、オペラを総合的に理解すること、歌唱や語学のコーチングについて指導する。  
又、歌の伴奏ピアニスト(オペラ・歌曲・合唱)としての経験を活かして、アンサンブルに必要な能力を修得させる。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	オリエンテーション 受講生の専攻分野を確認後、パフォーマンス課題を提示します。
2	パフォーマンス課題①の実践 各人の課題提出 パフォーマンス課題②の提示 パフォーマンス課題は、受講生の力量に応じて提示します。
3	パフォーマンス課題②の実践 各人の提示した課題曲の実践 パフォーマンス課題③提示
4	パフォーマンス課題③の実践 各人の提示した課題曲の実践 パフォーマンス課題④提示
5	パフォーマンス課題④の実践 各人の提示した課題曲の実践 パフォーマンス課題⑤提示
6	パフォーマンス課題⑤の実践 表現したい音の表情について、その習得法を記述する。
7	自ら課した練習プロセスの確認①
8	自ら課した練習プロセスの確認②
9	自ら課した練習プロセスの確認③
10	自ら課した練習プロセスの確認④
11	自ら課した練習プロセスの確認⑤
12	キーワードの再確認
13	前期成果発表に向けての準備①
14	前期成果発表に向けての準備②
15	前期の成果発表

科目名	演奏特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	阪本 朋子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
前期の目的と目標に加えて、基礎教養としての音楽、実社会へいかにつなげて行くかを探ります。「知識」から「知識を動かす力」を身につけます。					
授業概要					
前期と概要はほぼ同じ 加えて、コミュニケーションツールとしての音楽の言語的側面を考える。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
・提示する「パフォーマンス課題」を予習、復習において徹底研究してください。 ・受講に際しては、自らが研究したい楽曲の楽譜は必要部数を準備して授業に臨んでください。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
成果発表パフォーマンス 100%					
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
動きやすい服装での参加を提示することがあります。					
教員実務経験					
オペラの舞台作り欠かせないコレペティ(オペラ歌手の下稽古)の経験を活かして、オペラを総合的に理解すること、歌唱や語学のコーチングについて指導する。					

又、歌の伴奏ピアニスト(オペラ・歌曲・合唱)としての経験を活かして、アンサンブルに必要な能力を修得させる。

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション
2	今年度は前期の授業形態を継続致します(前期修了時に決定)。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
3	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
4	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
5	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
6	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
7	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
8	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
9	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
10	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
11	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
12	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
13	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
14	今年度は前期の授業形態を継続致します。 受講生各人の課題を全受講生で共有して頂き多角的な観点でディスカッションする能力を身につけます。
15	後期まとめ 演奏とプレゼンテーション

科目名	芸術学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	加賀城 健				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>学生がこれまでに取り組んできた作品や技法、展示方法など、研究内容を客観的に分析する。また、銘々の専門分野における歴史的背景や先行事例を調査することによって創作の意義を考える。</p> <p>作品を展開する能力を身につける為に、考えたアイデアに実際に取り組み、その成果を検証する。</p> <p>分析した内容や制作物を発表することで、プレゼンテーション能力を高める。</p>					
授業概要					
<p>毎回授業内容の説明を行い、授業時間内に調査や発表、制作を行う。</p> <p>研究の内容に伴い調整の上、各学生の制作場所や学内展示スペース、学外に移動する場合がある。</p> <p>基本対面で授業を行い、ディスカッションの時間を多くとる。</p> <p>変更が生じた場合、速やかに掲示登録する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>パワーポイント等のプレゼンテーションツールの使用が望ましい。可能であれば入手・習熟しておくこと。</p> <p>シラバスの進度は受講生の取り組みにより調整する。</p> <p>欠席の場合は欠席理由を知らせること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
出席・積極性			60		
授業内発表・レポート・制作物			40		
教科書情報					
教科書1	必要に応じて資料を配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					



教員実務経験	
--------	--

染色家の教員が、多数の作品を制作発表してきた経験と、美術・工芸分野での制作指導の経験を活かして、作品制作研究の能力を向上させる授業を行う。	
-----------------------------------------------------------------------	--

授業計画(各回予定)	
------------	--

授業回	授業内容
1	シラバスをもとに授業内容を説明する
2	自己紹介
3	自己紹介(作品編)
4	自己紹介(作品編)のつづき
5	作品の分析Ⅰ(技術・技法に関する考察)
6	作品の分析Ⅰ(研究計画作成)
7	技術・技法の試み-制作演習
8	技術・技法の試み-制作と発表
9	作品の分析Ⅱ(歴史に関する考察)
10	作品の分析Ⅱ(研究計画作成)
11	歴史考察からの試み-制作演習
12	歴史考察からの試み-制作と発表
13	作品の分析Ⅲ(展示に関する考察)
14	作品の分析Ⅲ(研究計画作成)
15	前期総括、レポートの課題説明

科目名	芸術学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	加賀城 健				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>学生がこれまでに取り組んできた作品や技法、展示方法など、研究内容を客観的に分析する。また、銘々の専門分野における歴史的背景や先行事例を調査することによって創作の意義を考える。</p> <p>作品を展開する能力を身につける為に、考えたアイデアに実際に取り組み、その成果を検証する。</p> <p>分析した内容や制作物を発表することで、プレゼンテーション能力を高める。</p>					
授業概要					
<p>毎回授業内容の説明を行い、授業時間内に調査や発表、制作を行う。</p> <p>研究の内容に伴い調整の上、各学生の制作場所や学内展示スペース、学外に移動する場合がある。</p> <p>基本対面で授業を行い、ディスカッションの時間を多くとる。</p> <p>変更が生じた場合、速やかに掲示登録する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>パワーポイント等のプレゼンテーションツールの使用が望ましい。可能であれば入手・習熟しておくこと。</p> <p>シラバスの進度は受講生の取り組みにより調整する。</p> <p>欠席の場合は欠席理由を知らせること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
出席・積極性			60		
授業内発表・レポート・制作物			40		
教科書情報					
教科書1	必要に応じて資料を配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験

染色家の教員が、多数の作品を制作発表してきた経験と、美術・工芸分野での制作指導の経験を活かして、作品制作研究の能力を向上させる授業を行う。

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	シラバスをもとに授業内容を説明する レポートの発表と前期制作物の講評
2	レポートの発表と前期制作物の講評
3	展覧会研究Ⅱ(作品鑑賞から学ぶ)
4	展覧会研究Ⅱ(作品鑑賞から学ぶ)のつづき
5	作家研究Ⅰ(専門分野)
6	作家研究からの試み-計画発表
7	作家研究からの試み-制作演習
8	作家研究からの試み-制作と発表
9	作家研究Ⅱ(専門外の分野)
10	作家研究Ⅱからの試み-計画発表
11	作家研究Ⅱからの試み-制作演習
12	作家研究Ⅱからの試み-制作と発表
13	展覧会研究Ⅲ(作品鑑賞から学ぶ)
14	展覧会研究Ⅲ(作品鑑賞から学ぶ)のつづき
15	総括、後期制作物の講評

科目名	彫刻特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	本多 紀朗				
クラス名					
授業目的と到達目標					
学部における基礎的な制作研究を基に、実際に作品を設置することをシミュレーションして一歩進んだ、広い視野に立った研究を進めることを目的とする。					
授業概要					
既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者について論評をする。それを踏まえ、自分自身の作品に置き換えてモニュメント設置までのシミュレーションを想定し、制作の意思と意向、素材への検討等を考えデッサン、エスキース等の制作を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
目的意識を持った受講態度で望む。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出課題の評価			80		
受講態度			20		
教科書情報					
教科書1	なし				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	なし				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
本多紀朗 彫刻家の教員が、数多くの制作発表と社会活動を行ってきた経験を活かし、造形力と表現力を修得させる。					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業の説明。既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察する。
2	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
3	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
4	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
5	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
6	既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者に付いて考察と論評する。
7	作品の制作及び設置などの経過。
8	作品の制作及び設置などの経過。
9	作品の制作及び設置などの経過。
10	作品の制作及び設置などの経過。
11	作品の制作及び設置などの経過。
12	設置作例の具体的状況の検証。
13	設置作例の具体的状況の検証。
14	設置作例の具体的状況の検証。
15	設置作例の具体的状況の検証。

科目名	彫刻特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	本多 紀朗				
クラス名					
授業目的と到達目標					
学部における基礎的な制作研究を基に、実際に作品を設置することをシミュレーションして一歩進んだ、広い視野に立った研究を進めることを目的とする。					
授業概要					
既に設置されている作品を取り上げ、作品及び作者について論評をする。それを踏まえ、自分自身の作品に置き換えてモニュメント設置までのシミュレーションを想定し、制作の意思と意向、素材への検討等を考えデッサン、エスキース等の制作を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
目的意識を持った受講態度で望む。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出課題の評価			80		
受講態度			20		
教科書情報					
教科書1	なし				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	なし				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
本多紀朗 彫刻家の教員が、数多くの制作発表と社会活動を行ってきた経験を活かし、造形力と表現力を修得させる。					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	設置作例の具体的状況の検証。
2	設置作例の具体的状況の検証。
3	設置作例の具体的状況の検証。
4	制作の意思、意向など時には制作の依頼など色々な場合の検証。
5	制作の意思、意向など時には制作の依頼など色々な場合の検証。
6	現場(場所)の調査、確認。
7	現場(場所)の調査、確認。
8	素材の検討(素材の特徴、表現の自由度、メンテナンスの問題)
9	素材の検討(素材の特徴、表現の自由度、メンテナンスの問題)
10	形態から形体。
11	設置(据付)取り付けに係わる問題点。
12	提案(プレゼンテーション)の想定を前提に。 デッサン。
13	提案(プレゼンテーション)の想定を前提に。 現場写真。
14	提案(プレゼンテーション)の想定を前提に。 エスキース(プランとデッサン)提案
15	提案(プレゼンテーション)の想定を前提に。 エスキース(プランとデッサン)決定

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>文芸学・演劇学で修士論文を書くための基礎知識を学び、具体的な作品分析をおこなう。          受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。          この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている。</p>					
授業概要					
<p>受講者それぞれの研究テーマにあわせ、まずは先行論文を丁寧に読み解き、論文の問題設定や構成を学ぶ。          そのうえで実際に作品の分析を試みる。          参加者同士の活発な質疑応答を期待する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>研究発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらう。          何に、どのような興味があるのか、よく探ってみて欲しい。          研究発表には相当の準備が必要となる。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					





科目名	美学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	加藤 哲弘				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神にある「自由の精神」と「創造性」に深く関わる「美学」という学問がじっさいにはどのようなものであるのかをその歴史的展開のなかで理解することを目的とする。芸術にたずさわる大学院生として、美学の正確な意味を他人に伝えることができるようになることを目指したい。					
授業概要					
第2回から第14回まで各回ごとに、美と感性を論じた美学史上の古典的な文献を探りあげて、内容紹介と検討を行う。具体的には、古代ギリシアや近代欧米の理論家や芸術家たちによる著作を概観する。なお下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合がある。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
講義までに授業資料として提示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに自らの制作や研究課題に直結する問題意識とともに理解すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など)			100%		
教科書情報					
教科書1	UNIPA 経由で事前にプリントを配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『美学の事典』				
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編		
参考書名2	『西洋美学史』				
出版社名	東京大学出版会	著者名	小田部胤久		
参考書名3	『美の変貌』				
出版社名	世界思想社	著者名	当津武彦編		
参考書名4	『西洋美学のエッセンス』				
出版社名	ペリかん社	著者名	今道友信編		
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

関西学院大学 大学博物館長(2020/21年度)	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1 0414 美と感性をめぐる美学の基本文献
2	2 0421 ピュタゴラスと古典的美意識の成立(古代ギリシャ)
3	3 0428 ウィトルウィウス『建築について』(古代ローマ)
4	4 0507(未定)
5	5 0512 アウグスティヌス『音楽論』(西欧中世)
6	6 0519 カスティリオーネ『廷臣論』1528(西欧ルネサンス)
7	7 0526 ホガース『美の分析』1753
8	8 0602 バーク『美と崇高の観念の起源』1757
9	9 0609 ローゼンクランツ『醜の美学』1853
10	10 0616 ボードレール『現代生活の画家』1863
11	11 0623 ニーチェ『悲劇の誕生』1872
12	12 0630 ルービン『20世紀美術におけるプリミティヴィズム』1984
13	13 0707 ゼキ『脳は美をいかに感じるか』1999
14	14 0714 ロペスほか『なぜ美を気にかけるのか』(日常生活の美学)2022
15	15 0728 まとめとコメント
16	16 09/22 講義概要
17	17 09/29 志賀重昂『日本風景論』
18	18 10/06 ハーン『知られぬ日本の面影』
19	19 10/14 岡倉覚三『茶の本』
20	20 10/20 柳宗悦『雑器の美』
21	21 10/27 九鬼周造『「いき」の構造』
22	22 11/10 谷崎潤一郎『陰翳礼賛』
23	23 11/17 和辻哲郎『風土』『古寺巡礼』
24	24 11/27 (未定)
25	25 12/01 タウト『日本の家屋と生活』
26	26 12/08 岸田劉生『美の本体』
27	27 12/15 矢代幸雄『日本美術の特質』
28	28 12/22 岡本太郎『日本の伝統』
29	29 01/19 四方田犬彦『「かわいい」論』
30	30 01/26 まとめとコメント

科目名	芸術学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	加藤 哲弘				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>芸術を制作することとも楽しむこととも異なる、芸術を「学ぶ」ということについて包括的な理解を得ることで、建学の精神にもある創造性を涵養することを講義の目的とする。本講義で得られた知見を各自の作品制作や批評活動に活かすとともに、受講生が、芸術を学ぶ大学院生として、自らの立脚点を自覚できるようになることを目指したい。</p>					
授業概要					
<p>第2回から第14回まで各回ごとに、芸術(アート)の目的を論じた古典的な文献を探りあげて、内容紹介と検討を行う。具体的には、古代ギリシアや近代欧米の理論家や芸術家たちによる著作を概観して、芸術が何のために存在するのかを考察する。なお下記の授業計画は暫定的なものであり、受講学生の興味に応じて変更する場合があります。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>講義開始の前に指示する参考文献を読んでおくこと。授業内容を知識として暗記するのではなく、つねに問題意識とともに理解するようにすること。また、機会があれば、美術館における作品展示を見たり、多様なジャンルの芸術を積極的に体験するようにしておくこと。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点平常点(授業内容への理解、ディスカッションへの積極的参加、質問への解答など)			100%		
教科書情報					
教科書1	UNIPA 経由で事前に授業資料を配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『美学の事典』				
出版社名	丸善出版	著者名	美学会編		
参考書名2	『芸術理論古典文献アンソロジー(西洋篇)』				
出版社名	幻冬舎	著者名	加藤哲弘編		
参考書名3	『美術の物語』				
出版社名	河出書房新社	著者名	ゴンブリッチ		
参考書名4	『芸術の諸相(講座美学第4巻)』				
出版社名	東京大学出版会	著者名	今道友信編		
参考書名5	『芸術学』				
出版社名	東京大学出版会	著者名	渡辺護		
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
関西学院大学博物館長(2020-21年度)	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1 0414 講義概要
2	2 0421 プラトン『国家』(c.375 BC)
3	3 0428 アリストテレス『詩学』(c.335-330 BC)
4	4 0507(未定)
5	5 0512 ルブラン「感情表現に関する講演」(1696)
6	6 0519 レッティング『ラオコオン』(1766)
7	7 0526 カント『判断力批判』(1790)
8	8 0602 ヘーゲル『美学講義』(1817-29)
9	9 0609 ハイデガー『芸術作品の根源』(1935)
10	10 0616 ベンヤミン『複製技術時代の芸術』(1935)
11	11 0623 ブルトン『シュルレアリスム宣言』(1924)
12	12 0630 グリーンバーグ「モダニズムの絵画」(1960)
13	13 0707 エーコ『開かれた作品』(1962)
14	14 0714 ダントー『ありふれたものの変容』(2017)
15	15 0728 まとめとコメント
16	16 0922 講義概要(モダンとポストモダン)
17	17 0929 ポストモダニズム建築
18	18 1006 パフォーマンスインスタレーション
19	19 1014(火)パブリックアート
20	20 1020 メディア芸術(マクレーハン)
21	21 1027 ポストコロニアル(サイド)
22	22 1110 ジェンダー(ポロック)
23	23 1117 ポップからサブカルチャー
24	24 1127(未定)
25	25 1201 脱構築建築(隈研吾)
26	26 1208 SEA 社会連携のアート
27	27 1215 NFT アート作品の唯一性と複製
28	28 1222 芸術のグローバル化とディアスポラ
29	29 0119 アクティヴィズム(バンクシー)
30	30 0126 まとめとコメント

科目名	写真特殊研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>【写真集を読む／作る】W・F・H・トルボット『自然の鉛筆』(1844-46)以来、無数の「写真集」が出版されてきました。写真集は今日では、「自立的な芸術形態」として捉えられるようになってきています。前期では、写真と言葉(キャプション／テキスト)の関係についていくつかのワークを重ねながら個々の考察を深めていきます。後期では、前期での経験を踏まえて、写真と言葉の組み合わせによって構成される写真集の制作(および制作レポートの作成)に取り組みます。写真表現・言語表現・デザイン等の領域を横断する創造的活動を通じて、建学の精神にある「創造性の奨励」「自由の精神の徹底」「総合のための分化と境界領域の開拓」等の理念を追求します。</p>					
授業概要					
<p>前期は具体的にいくつかの写真集を手にとってもらいながら双方向的に授業を進めます。積極的にディスカッションや合評に参加・介入してください。また、いくつかの具体的な課題を出しますので、自由な発想で取り組んでください。後期は、各人のテーマにしたがって、また各人の専門的なスキルも活かしながら写真集の制作を進めていきます。新しい試みに挑む機会にしてほしいと思います。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>写真や製本に関する専門的な知識やスキルを前提とする授業ではありません。課題には積極的に取り組んでください。なお、下記の授業計画は暫定的なものであり(特に後期)、受講生の関心等に応じて変更する場合があります。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点(授業への貢献度)			30		
授業内口頭発表			30		
最終課題			40		
教科書情報					
教科書1	授業中に適宜プリント等を配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『自然の鉛筆』				
出版社名	赤々舎	著者名	W・H・F・トルボット／青山勝(訳)		
参考書名2	The Photobook in Art and Society				
出版社名	Jovis	著者名			
参考書名3	さすらい				
出版社名	赤々舎	著者名	レイモン・ドゥパルドン／青山勝(訳)		
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			

参考 URL	
特記事項	
授業計画は暫定的なものであり、受講学生の関心等に応じて内容や順番を変更する場合がある。	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	イントロダクション: 写真集(Photobook)とは? 写真集をめぐる現在の状況とは?
2	ケーススタディ① トルボット『自然の鉛筆』 「写真集」の誕生
3	ケーススタディ② アンリ・カルティエ＝ブレッソン『かすめ取られたイメージ』 「自立的な芸術形態」としての「写真集」
4	〈第 1 課題〉自分が選んだ 1 枚の写真について記述する(タイトルとテキスト)①
5	〈第 1 課題〉自分が選んだ 1 枚の写真について記述する(タイトルとテキスト)②
6	ケーススタディ③ 山沢栄子『遠近』、東松照明『太陽の鉛筆』他
7	ケーススタディ④ レイモン・ドゥパルドン『さすらい』他
8	〈第 2 課題〉与えられた写真とキャプションをもとにテキストを執筆する①
9	〈第 2 課題〉与えられた写真とキャプションをもとにテキストを執筆する②
10	ケーススタディ⑤(内容は受講生の関心に応じて決定する)
11	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシーケンスを作り、物語を語る①
12	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシーケンスを作り、物語を語る②
13	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシーケンスを作り、物語を語る③
14	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシーケンスを作り、物語を語る④
15	前半の授業全体の振り返り(および夏期休暇中の課題の確認)
16	後半の授業にむけての再導入(各自の写真集制作の計画を確認する)
17	ケーススタディ⑥(内容は受講生の関心に応じて決定する)
18	ケーススタディ⑦(内容は受講生の関心に応じて決定する)
19	ケーススタディ⑧(内容は受講生の関心に応じて決定する)
20	中間発表・合評①
21	中間発表・合評②
22	中間発表・合評③
23	中間発表・合評④
24	写真集制作①
25	写真集制作②
26	写真集制作③
27	写真集制作④
28	制作レポート作成①
29	制作レポート作成②
30	全体の振り返りとまとめ

科目名	写真特殊研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	青山 勝				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>【写真集を読む／作る】W・F・H・トルボット『自然の鉛筆』(1844-46)以来、無数の「写真集」が出版されてきました。写真集は今日では、「自立的な芸術形態」として捉えられるようになってきています。前期では、写真と言葉(キャプション／テキスト)の関係についていくつかのワークを重ねながら個々の考察を深めていきます。後期では、前期での経験を踏まえて、写真と言葉の組み合わせによって構成される写真集の制作(および制作レポートの作成)に取り組みます。写真表現・言語表現・デザイン等の領域を横断する創造的活動を通じて、建学の精神にある「創造性の奨励」「自由の精神の徹底」「総合のための分化と境界領域の開拓」等の理念を追求します。</p>					
授業概要					
<p>前期は具体的にいくつかの写真集を手にとってもらいながら双方向的に授業を進めます。積極的にディスカッションに参加・介入してください。また、いくつかの具体的な課題を出しますので、自由な発想で取り組んでください。後期は、各人のテーマにしたがって、また各人の専門的なスキルも活かしながら写真集の制作を進めていきます。新しい試みに挑む機会にしてほしいと思います。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>写真や製本に関する専門的な知識やスキルを前提とする授業ではありません。課題には積極的に取り組んでください。なお、下記の授業計画は暫定的なものであり(特に後期)、受講生の関心等に応じて変更する場合があります。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点			40		
授業内口頭発表			30		
最終レポート			30		
教科書情報					
教科書1	授業中に適宜プリント等を配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『自然の鉛筆』				
出版社名	赤々舎	著者名	W・F・H・トルボット／青山勝(訳)		
参考書名2	The Photobook in Art and Society				
出版社名	Jovis	著者名			
参考書名3	さすらい				
出版社名	赤々舎	著者名	レイモン・ドゥパルドン／青山勝(訳)		
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			



参考 URL	
特記事項	
授業計画は暫定的なものであり、受講学生の関心等に応じて内容や順番を変更する場合がある。	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	イントロダクション: 写真集(Photobook)とは? 写真集をめぐる現在の状況とは?
2	ケーススタディ① トルボット『自然の鉛筆』 「写真集」の誕生
3	ケーススタディ② アンリ・カルティエ＝ブレッソン『かすめ取られたイメージ』 「自立的な芸術形態」としての「写真集」
4	〈第 1 課題〉自分が選んだ 1 枚の写真について記述する(タイトルとテキスト)①
5	〈第 1 課題〉自分が選んだ 1 枚の写真について記述する(タイトルとテキスト)②
6	ケーススタディ③ 山沢栄子『遠近』、東松照明『太陽の鉛筆』他
7	ケーススタディ④ レイモン・ドゥパルドン『さすらい』他
8	〈第 2 課題〉与えられた写真とキャプションをもとにテキストを執筆する①
9	〈第 2 課題〉与えられた写真とキャプションをもとにテキストを執筆する②
10	ケーススタディ⑤(内容は受講生の関心に応じて決定する)
11	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシークエンスを作り、物語を語る①
12	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシークエンスを作り、物語を語る②
13	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシークエンスを作り、物語を語る③
14	〈第 3 課題〉複数の写真を使ってシークエンスを作り、物語を語る④
15	前半の授業全体の振り返り(および夏期休暇中の課題の確認)
16	後半の授業にむけての再導入(各自の写真集制作の計画を確認する)
17	ケーススタディ⑥(内容は受講生の関心に応じて決定する)
18	ケーススタディ⑦(内容は受講生の関心に応じて決定する)
19	ケーススタディ⑧(内容は受講生の関心に応じて決定する)
20	中間発表・合評①
21	中間発表・合評②
22	中間発表・合評③
23	中間発表・合評④
24	写真集制作①
25	写真集制作②
26	写真集制作③
27	写真集制作④
28	制作レポート作成①
29	制作レポート作成②
30	全体の振り返りとまとめ

科目名	工芸・デザイン学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	瀧本 雅志				
クラス名					
授業目的と到達目標					
デザインは、いまや様々な領域におよぶ活動へと拡大・変質している。当授業では、そうした様々なデザインの営みの諸相を広く見渡し、その各々の活動の意味や他のデザイン活動との関係性への理解を深めることを目的とする。そのなかで、芸という営為がこれからどのような可能性を持ちうるかへの問題意識を高めること、そしてデザインという活動全体への現代的な眼差しを涵養することが、目標となる。					
授業概要					
【対面授業】最初に、工芸とは何かについて、日本の近代化の過程を振り返りながら考察する。また、それがデザインという問題意識と、いかなる関係を結んできたかを、近代工芸運動を概観しつつ考える。続けて、様々なデザイン分野を取り上げ、各々の注目すべき事例を中心に検討してゆく。「デザイン史」の授業とは異なり、歴史を体系的に辿る以上に、工芸やデザインの感覚や思考をアクチュアルに触発する作品や現象の主題的な分析に重点を置く。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
明るく楽しく元気に受講して下さい。授業内のみで「学習」を受動的に完結させるのではなく、自ら積極的に「学外」(本、図版、モノ、インターネット、まち、等々)へアクセスして、自己を活性化させてゆくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
期末テスト(筆記)			80		
平常点			20		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業の中で適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	「イントロダクション: 工芸とは何か?」: 「工芸」という概念が、いかにして形成されてきたかを、明治期の日本の近代化の黎明期に遡って検討する。その検討の過程で、「工芸」と「美術」と「技術」の違いという重要な問題についても、歴史的に考えてゆく。
2	「〈日本的なるもの〉と工芸・デザイン」: 〈日本的なるもの〉への自意識は、明治以前には基本的になかったはずだ。では、それはいつどのような状況で登場し、その初期には何が〈日本的〉とアピールされ、工芸はいかなる役回りを演じたのか? また、〈日本的な〉工芸・デザインとはどのようなものと見なされ、それが時代を通じて不変なのかどうかも考察の対象とする。
3	「ヨーロッパにおける近代工芸運動」: 近代における工芸の改革運動とは、どのような問題意識を持ち、どのような成果を出しながら、進展していったか? ウィリアム・モリスからバウハウスまでを一気に概観することで、近代工芸運動に働く方向性のいくつかを明確化してゆく。
4	「日本における近代工芸運動」: 柳宗悦の民芸運動について検討する。彼の唱えた「用の美」の思想や、彼と協力関係にあった工芸家たちや彼らの認めた無名の工人たちの工芸品を振り返るとともに、日本民藝館の活動にも注目してゆく。
5	「近代装飾と近代絵画」: 近代絵画が平面イメージ化し、それが壁面装飾化＝装飾壁面化してゆく諸例に注目する。マネ、モネ、ゴーギャン、ナビ派、クリムト、マチス、ポロック等々。また、そうした絵画の傾向に関わる理論として、ミシェル・フーコーやクレメント・グリーンバーグの言説も参考にする。
6	「近代建築の平面と工芸」: 近代建築に特徴的なベクトルのひとつは、水平面と垂直面による平面的構成にあった。その顕著な例として、ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエのいくつかの作品に注目する。また、そうした発想を、電灯や椅子から建築までに貫いて用いたヘリット・リートフェルトの作品を顧みる。
7	「ファッションと空間デザイン」: 衣服が単に着るためのものではなく、ファッションとして市民へ開かれてゆくのは、主にフランス革命以降である。だが、市民はすぐさまファッションナブルに変貌しえた訳ではなかった。それには、ファッションが夢のイメージとして上映される空間が、大きな意味を果たしていた。パッサージュ。そして初期のデパートの空間デザインについて、振り返る。
8	「流行とブランドのデザイン」: 19世紀半ばにシャルル・フレデリック・ウォルトの発明した、オート・クチュールという装置の画期性について見てゆく。またあわせて、ウォルト以前の、ファッションが必ずしも衣服のデザインのみを指さなかった時代について確認する。そのなかで、ファッションにおいて明白に存在する建築的次元について注目する。
9	「洋服を超える〈ファッション〉デザイン」: 60年代になると、トータルなライフスタイルの提言や実践として、ファッションが加速し始める。言い換えるなら、〈ファッション〉は、洋服だけの問題ではなく、他のファッションナブルなデザインと密接に連携することになる。60年代ロンドンのファッション・シーン、そしてピエール・カルダンのデザイン戦略を検討する。
10	「ミュージシャンのファッション・デザイン」: 第9回目とほぼ同じ問題意識から、今回は、特にポップミュージック・シーンのなかで発信されてきた広義の〈ファッション〉デザインについて、時代を振り返り概観してゆく。モッズ、パンク、ニューウェーブ、グラム、ニューロマンティック、グランジなどを中心に講義する。
11	「ファッションと現代建築のデザイン」: 2000年代に入ると、表参道には高級ブランドのファッションビルが次々と建ち始める。その設計は、各々が気鋭の現代建築家たちによるもので、表参道は以降、現代建築のショーケースとなる。また、2006～7年にLAの現代美術館で開催された「Skin + Bones」展では、ファッションと建築の交錯する諸例が示された。以上2つの方向から、両デザインの複合を検証する。
12	「グラフィックデザインと都市・建築」: 建物や都市のペーパー上でのデザインに新たな建築の可能性を見出した、アーキグラムをはじめとする60年代のアンビルトのデザインの可能性を探る。また、広告看板や、壁面への巨大なグラフィックが、建築や都市の空間性を大きく変容させる力について、ヴェンチュエリの言説やスーパーグラフィックスの実践を考察する。

13	「ポストモダンデザイン」:70年代後半以降の世界のポストモダン建築にくわえて、日本のバブル期のそれについても具体例を見てゆく。チャールズ・ジェンクスの建築思想や、ジャン・フランソワ・リオターのポストモダン概念も参照する。
14	「ミニマルデザインと建築」:最小限のデザインについて、批判的に考える。ミース・ファン・デル・ローエ、ミニマルズムのアートのほか、90年代以降のポスト・ミニマル建築の作品を分析し、現代におけるミニマルデザインの射程についても見定めてゆく。
15	「グローバルスタイルのデザイン」:グローバル化の時代に、クールで経済的で市民に開かれた先端技術の建築イメージを提示しているレンゾ・ピアノ、ノーマン・フォスター、リチャード・ロジャースの建築デザインを検討してゆく。
16	「構造デザイン」:構造は、建築において必ずしも黒子ではない。構造が優れたデザインとなって明示的に現れた諸例を紹介する。とりわけ、構造上の工夫や複雑な構造計算を要する近現代建築のある種のタイプでは、すぐれた構造家はスター的存在感を発揮してきた。ピーター・ライス、佐々木睦朗、セシル・バルモンドらの作例を見ながら、構造デザインの美学を検討する。
17	「都市デザイン」:過去の都市デザインの中から、とりわけ重要と思われる事例を再考する。オスマンのパリ改造やグランプロジェなどの実現例はもちろん、ル・コルビュジエ、レム・コールハース等の過剰な都市デザインの思想も、考察の材料とする。
18	「ランドスケープデザイン」:都市の公共空間デザインや造園デザインと重なりつつも、それらとは微妙に異なるランドスケープデザインの可能性の中心を見据える。それは、ランドスケープ(=風景)という概念の発生やその変遷を顧みる試みの意義も持つ。建物とランドスケープのデザインが一体連続化した現代の諸例についても見てゆく。
19	「日本のインテリアデザイン」:近代化以降の日本の住環境をめぐる歴史を概観する。室内空間のデザインにくわえて、家具や環境のデザインも考察する。また、剣持勇や倉俣史朗といったデザイナーについても概説する。
20	「タイポグラフィのデザイン」:産業化時代、バウハウス、国際タイポグラフィック様式、ニューヨーク派、ニューウェーブ派、コンピュータ作成のタイポグラフィについて、時代順に概観してゆく。特に、国際タイポグラフィック様式にスポットをあてる。
21	「サウンドデザインと空間デザイン」:音楽は、音により空間を変容させ、新たな空間性を創造してゆく行為だという意識が、ある時期以降活性化しだす。現代音楽における空間デザイン、またポップミュージックに浮上した空間デザインの先駆的例について、体験する機会を設ける。後者については、特に奇才フィル・スペクターに注目する。
22	「サウンドデザインとコンセプチュアル・アルバム」:前回に引き続き、今回は60年代のポップミュージックにおけるサウンドデザインの意識の高まりを検討してゆく。ビーチボーイズ、ビートルズ、そしてフィル・スペクターの回帰について検討しながら、コンセプトアルバムというアイデアや、彼らのサウンドデザインのその後への影響について探ってゆく。
23	「映画のタイトルデザイン」:映画の冒頭に作品名や人名等とともに登場するタイトルのいくつかは、本の表紙以上に作品の印象を最初に効果的に告げる優れたデザイン性を見せる。ソウル・バス、カイル・クーパー等による魅力的な作品例に目を向ける。
24	「TVゲームとブックデザイン」:TVゲームが新しいメディアとして大きな可能性を感じさせた時代があった。パソコンやインターネットが普及する前夜とも言うべき、80年代後半から90年代前半にかけてだ。この時期、そうした可能性をいかに本にして告げるかというデザイン目標を持った本が登場した。それらを紹介しつつ、新旧メディアの動的な関係性についてケーススタディする。
25	「展覧会とアートのスペースのデザイン」:美術館と作品の関係は歴史的に一様ではないし、展示のデザインも時代や美術館や展覧会のタイプによって異なる。それらのデザインをいくつかに大別しながら、各々の代表例を見てゆく。
26	「CIのデザイン」:会社というそのままでは目には見えない組織のイメージを、どう戦略的に統一化して社会へ訴求してゆくか。そうした問題をデザインによって解決する手法について考えてゆく。高級ブランドのロゴのデザインの高級性についても検討する。
27	「情報デザイン」:いかに情報をわかりやすく効果的に伝えるかという意味で、ますます情報デザインは、われわれに必須のリテラシーと化している。情報デザインという考え方がいかにして登場し、どのような有効性を持つかを、ページックに確認してゆく。オットー・ノイラート、エドワード・タフティ、アフォーダンスなどにも注目する。

28	「キャリアデザイン」:こうした言葉があるからには、職業人生は、いまやデザインするものとも考えられているようだ。しかし、キャリアをデザインすることとは、就職活動上や実際の仕事上やキャリアアップ戦略上の能力アップとでは、どう異なるのか？ キャリア「デザイン」という言説の作動する状況やその功罪について、批判的に分析する。
29	「コミュニティデザイン／ソーシャル・デザイン」:社会や地域は、放っておいてもプラスの方向には向かわないかもしれない。計画でも単なる実践行為でもなく、コミュニティや社会をデザインするとはどういうことか？ そのポジティブな諸例を参照してゆく。
30	「まとめ」:これまでの授業を振り返り、総括や重要点の確認を行う。また、これまでに言及していないが重要なトピックについて、受講する学生の関心も踏まえながら、補足的にいくつか説明する。

科目名	工芸・デザイン学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	瀧本 雅志				
クラス名					
授業目的と到達目標					
デザインは、いまや様々な領域におよぶ活動へと拡大・変質している。当授業では、そうした様々なデザインの営みの諸相を広く見渡し、その各々の活動の意味や他のデザイン活動との関係性への理解を深めることを目的とする。そのなかで、工芸という営為がこれからどのような可能性を持ちうるかへの問題意識を高めること、そしてデザインという活動全体への現代的な眼差しを涵養することが、目標となる。					
授業概要					
最初に、工芸とは何かについて、日本の近代化の過程を振り返りながら考察する。また、それがデザインという問題意識と、いかなる関係を結んできたかを、近代工芸運動を概観しつつ考える。続けて、様々なデザインの分野を取り上げ、各々の注目すべき事例を中心に検討してゆく。「デザイン史」の授業とは異なり、歴史を体系的に辿る以上に、工芸やデザインの感覚や思考をアクチュアルに触発する作品や現象の主題的な分析に重点を置く。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
明るく楽しく元気に受講して下さい。授業内のみで「学習」を受動的に完結させるのではなく、自ら積極的に「学外」(本、図版、モノ、インターネット、まち、等々)へアクセスして、自己を活性化させてゆくこと。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
期末テスト(筆記)			80		
平常点			20		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業の中で適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	「イントロダクション: 工芸とは何か?」: 「工芸」という概念が、いかにして形成されてきたかを、明治期の日本の近代化の黎明期に遡って検討する。その検討の過程で、「工芸」と「美術」と「技術」の違いという重要な問題についても、歴史的に考えてゆく。
2	「〈日本的なるもの〉と工芸・デザイン」: 〈日本的なるもの〉への自意識は、明治以前には基本的になかったはずだ。では、それはいつどのような状況で登場し、その初期には何が〈日本的〉とアピールされ、工芸はいかなる役回りを演じたのか? また、〈日本的な〉工芸・デザインとはどのようなものと見なされ、それが時代を通じて不変なのかどうかも考察の対象とする。
3	「ヨーロッパにおける近代工芸運動」: 近代における工芸の改革運動とは、どのような問題意識を持ち、どのような成果を出しながら、進展していったか? ウィリアム・モリスからバウハウスまでを一気に概観することで、近代工芸運動に働く方向性のいくつかを明確化してゆく。
4	「日本における近代工芸運動」: 柳宗悦の民芸運動について検討する。彼の唱えた「用の美」の思想や、彼と協力関係にあった工芸家たちや彼らの認めた無名の工人たちの工芸品を振り返るとともに、日本民藝館の活動にも注目してゆく。
5	「近代装飾と近代絵画」: 近代絵画が平面イメージ化し、それが壁面装飾化＝装飾壁面化してゆく諸例に注目する。マネ、モネ、ゴーギャン、ナビ派、クリムト、マチス、ポロック等々。また、そうした絵画の傾向に関わる理論として、ミシェル・フーコーやクレメント・グリーンバーグの言説も参考にする。
6	「近代建築の平面と工芸」: 近代建築に特徴的なベクトルのひとつは、水平面と垂直面による平面的構成にあった。その顕著な例として、ル・コルビュジエやミース・ファン・デル・ローエのいくつかの作品に注目する。また、そうした発想を、電灯や椅子から建築までに貫いて用いたヘリット・リートフェルトの作品を顧みる。
7	「ファッションと空間デザイン」: 衣服が単に着るためのものではなく、ファッションとして市民へ開かれてゆくのは、主にフランス革命以降である。だが、市民はすぐさまファッションナブルに変貌しえた訳ではなかった。それには、ファッションが夢のイメージとして上映される空間が、大きな意味を果たしていた。パッサージュ。そして初期のデパートの空間デザインについて、振り返る。
8	「流行とブランドのデザイン」: 19世紀半ばにシャルル・フレデリック・ウォルトの発明した、オート・クチュールという装置の画期性について見てゆく。またあわせて、ウォルト以前の、ファッションが必ずしも衣服のデザインのみを指さなかった時代について確認する。そのなかで、ファッションにおいて明白に存在する建築的次元について注目する。
9	「洋服を超える〈ファッション〉デザイン」: 60年代になると、トータルなライフスタイルの提言や実践として、ファッションが加速し始める。言い換えるなら、〈ファッション〉は、洋服だけの問題ではなく、他のファッションナブルなデザインと密接に連携することになる。60年代ロンドンのファッション・シーン、そしてピエール・カルダンのデザイン戦略を検討する。
10	「ミュージシャンのファッション・デザイン」: 第9回目とほぼ同じ問題意識から、今回は、特にポップミュージック・シーンのなかで発信されてきた広義の〈ファッション〉デザインについて、時代を振り返り概観してゆく。モッズ、パンク、ニューウェーブ、グラム、ニューロマンティック、グランジなどを中心に講義する。
11	「ファッションと現代建築のデザイン」: 2000年代に入ると、表参道には高級ブランドのファッションビルが次々と建ち始める。その設計は、各々が気鋭の現代建築家たちによるもので、表参道は以降、現代建築のショーケースとなる。また、2006～7年にLAの現代美術館で開催された「Skin + Bones」展では、ファッションと建築の交錯する諸例が示された。以上2つの方向から、両デザインの複合を検証する。
12	「グラフィックデザインと都市・建築」: 建物や都市のペーパー上でのデザインに新たな建築の可能性を見出した、アーキグラムをはじめとする60年代のアンビルトのデザインの可能性を探る。また、広告看板や、壁面への巨大なグラフィックが、建築や都市の空間性を大きく変容させる力について、ヴェンチュエリの言説やスーパーグラフィックスの実践を考察する。

13	「ポストモダンデザイン」:70年代後半以降の世界のポストモダン建築にくわえて、日本のバブル期のそれについても具体例を見てゆく。 チャールズ・ジェンクスの建築思想や、ジャン・フランソワ・リオタールのポストモダン概念も参照する。
14	「ミニマルデザインと建築」:最小限のデザインについて、批判的に考える。ミース・ファン・デル・ローエ、ミニマルズムのアートのほか、90年代以降のポスト・ミニマル建築の作品を分析し、現代におけるミニマルデザインの射程についても見定めてゆく。
15	「グローバルスタイルのデザイン」:グローバル化の時代に、クールで経済的で市民に開かれた先端技術の建築イメージを提示しているレンゾ・ピアノ、ノーマン・フォスター、リチャード・ロジャースの建築デザインを検討してゆく。
16	「構造デザイン」:構造は、建築において必ずしも黒子ではない。構造が優れたデザインとなって明示的に現れた諸例を紹介する。とりわけ、構造上の工夫や複雑な構造計算を要する近現代建築のある種のタイプでは、すぐれた構造家はスター的存在感を発揮してきた。ピーター・ライス、佐々木睦朗、セシル・バルモンドらの作例を見ながら、構造デザインの美学を検討する。
17	「都市デザイン」:過去の都市デザインの中から、とりわけ重要と思われる事例を再考する。オスマンのパリ改造やグランプロジェなどの実現例はもちろん、ル・コルビュジエ、レム・コールハース等の過剰な都市デザインの思想も、考察の材料とする。
18	「ランドスケープデザイン」:都市の公共空間デザインや造園デザインと重なりつつも、それらとは微妙に異なるランドスケープデザインの可能性の中心を見据える。それは、ランドスケープ(=風景)という概念の発生やその変遷を顧みる試みの意義も持つ。建物とランドスケープのデザインが一体連続化した現代の諸例についても見てゆく。
19	「日本のインテリアデザイン」:近代化以降の日本の住環境をめぐる歴史を概観する。室内空間のデザインにくわえて、家具や環境のデザインも考察する。また、剣持勇や倉俣史朗といったデザイナーについても概説する。
20	「タイポグラフィのデザイン」:産業化時代、バウハウス、国際タイポグラフィック様式、ニューヨーク派、ニューウェーブ派、コンピュータ作成のタイポグラフィについて、時代順に概観してゆく。特に、国際タイポグラフィック様式にスポットをあてる。
21	「サウンドデザインと空間デザイン」:音楽は、音により空間を変容させ、新たな空間性を創造してゆく行為だという意識が、ある時期以降活性化しだす。現代音楽における空間デザイン、またポップミュージックに浮上した空間デザインの先駆的例について、体験する機会を設ける。後者については、特に奇才フィル・スペクターに注目する。
22	「サウンドデザインとコンセプトアルバム」:前回に引き続き、今回は60年代のポップミュージックにおけるサウンドデザインの意識の高まりを検討してゆく。ビーチボーイズ、ビートルズ、そしてフィル・スペクターの回帰について検討しながら、コンセプトアルバムというアイデアや、彼らのサウンドデザインのその後への影響について探ってゆく。
23	「映画のタイトルデザイン」:映画の冒頭に作品名や人名等とともに登場するタイトルのいくつかは、本の表紙以上に作品の印象を最初に効果的に告げる優れたデザイン性を見せる。ソウル・バス、カイル・クーパー等による魅力的な作品例に目を向ける。
24	「TVゲームとブックデザイン」:TVゲームが新しいメディアとして大きな可能性を感じさせた時代があった。パソコンやインターネットが普及する前夜とも言うべき、80年代後半から90年代前半にかけてだ。この時期、そうした可能性をいかに本にして告げるかというデザイン目標を持った本が登場した。それらを紹介しつつ、新旧メディアの動的な関係性についてケーススタディする。
25	「展覧会とアートスペースのデザイン」:美術館と作品の関係は歴史的に一様ではないし、展示のデザインも時代や美術館や展覧会のタイプによって異なる。それらのデザインをいくつかに大別しながら、各々の代表例を見てゆく。
26	「CIのデザイン」:会社というそのままでは目には見えない組織のイメージを、どう戦略的に統一化して社会へ訴求してゆくか。そうした問題をデザインによって解決する手法について考えてゆく。高級ブランドのロゴのデザインの高級性についても検討する。
27	「情報デザイン」:いかに情報をわかりやすく効果的に伝えるかという意味で、ますます情報デザインは、われわれに必須のリテラシーと化している。情報デザインという考え方がいかにして登場し、



	どのような有効性を持つかを、ベーシックに確認してゆく。オットー・ノイラート、エドワード・タフティ、アフォーダンスなどにも注目する。
28	「キャリアデザイン」: こうした言葉があるからには、職業人生は、いまやデザインするものとも考えられているようだ。しかし、キャリアをデザインすることとは、就職活動上や実際の仕事上やキャリアアップ戦略上の能力アップとでは、どう異なるのか? キャリア「デザイン」という言説の作動する状況やその功罪について、批判的に分析する。
29	「コミュニティデザイン/ソーシャル・デザイン」: 社会や地域は、放っておいてもプラスの方向には向かわないかもしれない。計画でも単なる実践行為でもなく、コミュニティや社会をデザインするとはどういうことか? そのポジティブな諸例を参照してゆく。
30	「まとめ」: これまでの授業を振り返り、総括や重要点の確認を行う。また、これまでに言及していないが重要なトピックについて、受講する学生の関心も踏まえながら、補足的にいくつか説明する。

科目名	美術史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	河田 昌之				
クラス名					
授業目的と到達目標					
日本美術の特徴を作品内容の読み解きを通して理解することを目指します。仏画、物語や随筆、意匠などさまざまなジャンルに分類されるなかから、代表的な古美術作品を選んで、独自の造形感覚や表現を考えながら、日本美術に対して多くの視点を持つことを目標にします。					
授業概要					
伊勢物語は源氏物語と並ぶ平安時代を代表する古典文学として知られています。「むかし、をとこありけり」をどこかで聞いたことがあるでしょう。中学、高校時代に習ったことがある人も多いかと思います。在原業平(825～880)はこの物語の主人公として、今も人気不衰えません。2025年は業平の生誕1200年に当たります。この物語は美術とも関連があり、絵巻や工芸には伊勢物語を題材にした作品が残されています。この機会に伊勢物語を取り上げます。その美術とともに物語の魅力について解説します。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
展覧会でさまざまな作品を観てください。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
レポート			70		
平常の授業態度			30		
教科書情報					
教科書1	使用しません。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	『伊勢物語 造形表現集成』				
出版社名	思文閣出版	著者名	河田昌之 赤澤真理 大口裕子 伊永陽子 編		
参考書名2	『宗達 伊勢物語図物色紙』				
出版社名	思文閣出版	著者名	羽衣国際大学日本文化研究所 伊勢物語 絵研究会		
参考書名3	『伊勢物語絵巻絵本大成』				
出版社名	角川学芸出版	著者名	羽衣国際大学日本文化研究所編		
参考書名4	展覧会図録「伊勢物語 雅と恋のかたち」2007年				
出版社名	和泉市久保惣記念美術館	著者名	和泉市久保惣記念美術館		
参考書名5	『伊勢物語全読解』				
出版社名	和泉書院	著者名	片桐洋一		
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
登録博物館の学芸員として、約40年間を展覧会の企画や美術品の収集、保管、展示等の実務にあたり、そのうちの約10年間は館長として組織運営や対外的な交流などの美術館マネージメント分野にも携わる。展覧会の企画や開催の実務、海外での作品調査の経験も多い。著書、論文が複数ある。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	伊勢物語と美術 ～全体像の概説～
2	文学史的側面 伊勢物語について(平安時代の物語と伊勢物語)
3	業平のイメージ ～和歌、歌仙絵、彫刻から～
4	美術史的側面 伊勢物語と美術1(平安～江戸時代 絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風)
5	美術史的側面 伊勢物語と美術2(平安～江戸時代 絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風)
6	美術史的側面 伊勢物語と美術3(平安～江戸時代 絵巻・冊子・扇面・色紙・屏風)
7	鎌倉時代の絵巻 1 ～重文「伊勢物語絵巻」(和泉市久保惣記念美術館本)～
8	鎌倉時代の絵巻 2 ～「梵字経刷白描伊勢物語絵巻」(逸翁美術館ほか蔵)～
9	南北朝から室町時代の色紙 ～「伊勢物語図色紙」(中之島香雪美術館本)ほか～
10	室町時代の絵巻と絵本 1 ～「伊勢物語絵巻」(小野家本)ほか～
11	室町時代の絵巻と絵本 2～「伊勢物語絵」(ブリティッシュ・ミュージアム本)ほか～
12	室町時代の絵巻と絵本 3 ～「伊勢物語絵本」(中尾家本)ほか～
13	室町から江戸時代初期の伊勢物語 「伊勢物語図色紙貼付屏風」(サントリー美術館本)を中心に
14	江戸時代初期の伊勢物語版本 嵯峨本「伊勢物語」
15	前期のまとめ 伊勢物語と美術
16	工芸と伊勢物語の概要 ～ 代表的な作品を中心にした工芸との関わり～
17	工芸と伊勢物語 1 ～漆工、染織、ひいながた～
18	工芸と伊勢物語 2 ～漆工、染織 ひいながたい～
19	琳派と工芸 1 ～光琳「八橋螺鈿蒔絵硯箱」(東博蔵)ほか～
20	琳派と工芸 2 ～乾山の作品を中心に～
21	工芸と伊勢物語 1 ～染織とひいな型～
22	工芸と伊勢物語 2 ～染織とひいな型～
23	伊勢物語と芸能 ～伊勢物語と能 1～
24	伊勢物語と芸能 ～伊勢物語と能 2～
25	伊勢物語と建築 1 ～庭園意匠と八橋～
26	伊勢物語と建築 2 ～庭園意匠と八橋～
27	伊勢物語と関連する土地と風景
28	伊勢物語と宝塚レビュー 享受史を彩る舞台
29	伊勢物語の美術のまとめ
30	伊勢物語の造形表現の特徴 モティーフ、テーマ、時代性から見る

科目名	文芸学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	福井 慎二				
クラス名					
授業目的と到達目標					
ディプロマポリシーにある小説家・国語科教員としての専門知識を身につけるために昭和文学の古典と言える太宰治の作品を読むことで小説の書き方・表現を学んだり、国語の教材研究に役立てることを目的にする。太宰の作品理解を深めることを目標とする>					
授業概要					
受講者が太宰の初期・中期の作品を読み、作品を理解する上で何を問題にしたらよいか考えたことを毎回発表し討論する。アニメ・映画も参照して言語表現と映像表現との違いなどを感じて、作品理解を深められるようにする。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
作品を読んで問題点を考え、授業で意見発表できるように準備することが必要。作品を読むのに30分～数時間かかり、問題点を考えるのに数時間必要となる。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
主体的な授業参加			30		
レポートまたは授業の発表担当			70		
教科書情報					
教科書1	授業中にプリントを配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
太宰の作品は著作権切れのため「青空文庫」のホームページで無料で閲覧・ダウンロード可能です。国立国会図書館の蔵書検索通じてでも閲覧できます。手持ちの本も利用してください。					

教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1ガイダンス・発表担当者決定 太宰の伝記 太宰の作品は私小説のため、伝記確認して作品理解に役立てる。
2	2私小説について(講義) 大正時代に私小説が生まれた文学史的状况と私小説をめぐる論争、現代の私小説作家の捉え方を確認する。
3	3「葉」(以下レポート発表と討議) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
4	4「魚服記」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
5	5「猿面冠者」 入れ子構造の小説形式を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
6	6「思ひ出」 ビデオ鑑賞 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
7	7「道化の華」 映画「ピカレスク 人間失格」参照 太宰のメタフィクションの独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
8	8「狂言の神」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
9	9「虚構の春」 太宰の書簡体小説の独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
10	10「ダス・ゲマイネ」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
11	11「二十世紀旗手」発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
12	12「HUMAN LOST」映画「ピカレスク 人間失格」参照 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
13	13「姥捨」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する
14	14「富嶽百景」その1 TVドラマ・映画「富嶽百景」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『富嶽百景』の映画の特徴を確認し参照し、次回の討議に役立てる。
15	15「富嶽百景」その2 レポート発表と討議 【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限 提出先はUNIPA「課題提出」】
16	16 ガイダンス・レポート返却・発表担当者決定
17	17「秋風記」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討議する

18	18『女生徒』 アニメ「女生徒」鑑賞 朗読CD 太宰の女性独白体の特徴を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
19	19『駆け込み訴へ』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
20	20『カチカチ山』(『御伽草紙』①) 参考DVD「桃太郎 海の神兵」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
21	21『浦島さん』(『御伽草紙』②) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
22	22『女の決闘』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
23	23『走れメロス』その1 アニメ「走れメロス」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『走れメロス』のアニメの特徴を確認し参照し、次回の討論に役立てる
24	24『走れメロス』その2 レポート発表と討論 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
25	25『竹青』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
26	26『新樹の言葉』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
27	27『右大臣実朝』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
28	28『貧の意地』(『新釈諸国噺』Ⅰ) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
29	29『赤い太鼓』(『新釈諸国噺』Ⅱ) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
30	30『津軽』 【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限 提出先はUNIPA「課題提出」】

科目名	文芸学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	福井 慎二				
クラス名					
授業目的と到達目標					
昭和文学の古典と言える太宰治の作品を読むことで小説の書き方・表現を学んだり、教員志望の受講者にとって教材研究に役立てることを目的にする。太宰の作品理解を深めることを目標とする>					
授業概要					
受講者が太宰の初期・中期の作品を読み、作品を理解する上で何を問題にしたらよいか考えたことを毎回発表し討論する。アニメ・映画も参照して言語表現と映像表現との違いなどを感じて、作品理解を深められるようにする。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
作品を読んで問題点を考え、授業で意見発表できるように準備することが必要。作品を読むのに30分～数時間かかり、問題点を考えるのに数時間必要となる。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
主体的な授業参加			30		
レポートまたは授業の発表担当			70		
教科書情報					
教科書1	授業中にプリントを配布する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
太宰の作品は著作権切れのため「青空文庫」のホームページで無料で閲覧・ダウンロード可能です。国立国会図書館の蔵書検索通じても閲覧できます。手持ちの本も利用してください。					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1ガイダンス・発表担当者決定 太宰の伝記太宰の作品は私小説のため、伝記確認して作品理解に役立てる。
2	2私小説について(講義) 大正時代に私小説が生まれた文学史的状況と私小説をめぐる論争、現代の私小説作家の捉え方を確認する。
3	3「葉」(以下レポート発表と討議) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
4	4「魚服記」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
5	5「猿面冠者」 入れ子構造の小説形式を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
6	6「思ひ出」ビデオ鑑賞 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
7	7「道化の華」映画「ピカレスク 人間失格」参照 太宰のメタフィクションの独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
8	8「狂言の神」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
9	9「虚構の春」 太宰の書簡体小説の独自性を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
10	10「ダス・ゲマイネ」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
11	11「二十世紀旗手」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
12	12「HUMAN LOST」映画「ピカレスク 人間失格」参照 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
13	13「姥捨」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
14	14「富嶽百景」その1 TVドラマ・映画「富嶽百景」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『富嶽百景』の映画の特徴を確認し参照し、次回の討論に役立てる。
15	15「富嶽百景」その2 レポート発表と討論 【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限 提出先はUNIPA「課題提出」】
16	16 ガイダンス・レポート返却・発表担当者決定
17	17「秋風記」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する



18	18『女生徒』 アニメ「女生徒」鑑賞 朗読CD 太宰の女性独白体の特徴を確認する。発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
19	19『駆け込み訴へ』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
20	20『カチカチ山』(『御伽草紙』①) 参考DVD「桃太郎 海の神兵」 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
21	21『浦島さん』(『御伽草紙』②) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
22	22『女の決闘』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
23	23『走れメロス』その1 アニメ「走れメロス」鑑賞 言語表現と映像表現との違いなどを感じるべく、『走れメロス』のアニメの特徴を確認し参照し、次回の討論に役立てる。
24	24『走れメロス』その2 レポート発表と討論 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
25	25『竹青』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
26	26『新樹の言葉』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
27	27『右大臣実朝』 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
28	28『貧の意地』(『新釈諸国噺』Ⅰ) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
29	29『赤い太鼓』(『新釈諸国噺』Ⅱ) 発表担当者が作品を理解するうえで問題にすべきことを報告し、受講者がそれに質問・意見発表し討論する
30	30『津軽』 【授業中の発表を担当しなかった学生のレポート提出期限 提出先はUNIPA「課題提出」】

科目名	原典研究 V	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	龍本 那津子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
『源氏物語』に代表される日本の古典文学について、基礎的なことを学び、実際の作品を読んで理解を深め、日本の古典文学に親しむことを目的とする。					
授業概要					
『源氏物語』に関する基本的な知識を学びつつ、巻ごとにテキストに従って読み進める。同時に平安時代の物語に見られる当時の文化や言語についても知見を深める。 また、必要に応じて同時代の物語や和歌、日記などにもふれていく。 これらの文学作品を読むことによって、当時の人々のものの見方や感じ方をうかがい知ることができよう。授業では各自担当箇所を決めて輪読形式で進めていく。 また、学生の興味関心に応じて随時研究発表を取り入れていく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
古語辞典(出版社問わず・電子辞書可)は必ず用意すること。 『源氏物語』の本文(原文)が載っているテキスト(文庫本でよい)があれば望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
発表			50		
レポート			25		
授業に取り組む姿勢			25		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業で紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	『源氏物語』について基礎知識と資料の紹介
2	『源氏物語』を読む (1)「桐壺」①
3	『源氏物語』を読む (1)「桐壺」②
4	『源氏物語』を読む (2)「帚木」
5	『源氏物語』を読む (3)「空蟬」
6	『源氏物語』を読む (4)「夕顔」①
7	『源氏物語』を読む (4)「夕顔」②
8	『源氏物語』を読む (5)「若紫」①
9	『源氏物語』を読む (5)「若紫」②
10	『源氏物語』を読む (5)「若紫」③
11	『源氏物語』を読む (6)「葵」
12	『源氏物語』を読む (7)「賢木」
13	平安時代の女性と文学
14	『紫部日記』と『紫式部集』
15	前期のまとめとレポートについての注意
16	レポートに基づく発表
17	『源氏物語』を読む (8)「須磨」
18	『源氏物語』を読む (9)「明石」
19	『源氏物語を読む』(10)「藤裏葉」
20	『源氏物語を読む』(11)「野分」
21	『源氏物語を読む』(12)「若菜上」
22	『源氏物語を読む』(13)「若菜下」
23	『源氏物語』を読む(14)「柏木」
24	『源氏物語』を読む (15)「浮舟」
25	『源氏物語』を読む (16)「手習」
26	『源氏物語』を読む (17)「夢浮橋」
27	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答①
28	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答②
29	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答③
30	後期のまとめと学年末レポートについての注意。

科目名	原典研究 V	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	龍本 那津子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
『源氏物語』に代表される日本の古典文学について、基礎的なことを学び、実際の作品を読んで理解を深め、日本の古典文学に親しむことを目的とする。					
授業概要					
『源氏物語』に関する基本的な知識を学びつつ、巻ごとにテキストに従って読み進める。同時に平安時代の物語に見られる当時の文化や言語についても知見を深める。 また、必要に応じて同時代の物語や和歌、日記などにもふれていく。 これらの文学作品を読むことによって、当時の人々のものの見方や感じ方をうかがい知ることができよう。授業では各自担当箇所を決めて輪読形式で進めていく。 また、学生の興味関心に応じて随時研究発表を取り入れていく。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
古語辞典(出版社問わず・電子辞書可)は必ず用意すること。 『源氏物語』の本文(原文)が載っているテキスト(文庫本でよい)があれば望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
発表			50		
レポート			25		
授業に取り組む姿勢			25		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業で紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験

授業計画(各回予定)

授業回	授業内容
1	『源氏物語』について基礎知識と資料の紹介
2	『源氏物語』を読む (1)「桐壺」①
3	『源氏物語』を読む (1)「桐壺」②
4	『源氏物語』を読む (2)「帚木」
5	『源氏物語』を読む (3)「空蟬」
6	『源氏物語』を読む (4)「夕顔」①
7	『源氏物語』を読む (4)「夕顔」②
8	『源氏物語』を読む (5)「若紫」①
9	『源氏物語』を読む (5)「若紫」②
10	『源氏物語』を読む (5)「若紫」③
11	『源氏物語』を読む (6)「葵」
12	『源氏物語』を読む (7)「賢木」
13	平安時代の女性と文学
14	『紫部日記』と『紫式部集』
15	前期のまとめとレポートについての注意
16	レポートに基づく発表
17	『源氏物語』を読む (8)「須磨」
18	『源氏物語』を読む (9)「明石」
19	『源氏物語を読む』(10)「藤裏葉」
20	『源氏物語を読む』(11)「野分」
21	『源氏物語を読む』(12)「若菜上」
22	『源氏物語を読む』(13)「若菜下」
23	『源氏物語』を読む(14)「柏木」
24	『源氏物語』を読む (15)「浮舟」
25	『源氏物語』を読む (16)「手習」
26	『源氏物語』を読む (17)「夢浮橋」
27	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答①
28	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答②
29	各自の問題意識を生かした研究発表および質疑応答③
30	後期のまとめと学年末レポートについての注意。

科目名	音楽学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	前川 陽郁				
クラス名					
授業目的と到達目標					
前期 「イギリス音楽におけるイギリス的なもの」というテーマで、イギリス音楽の独自性について考える。					
後期 「音楽と絵画」というテーマで、この二つのジャンル間の相互影響について考える。					
授業概要					
前期 イギリスは、大陸のヨーロッパ諸国ほど相互に侵略することがなかった一方で、大陸諸国の文化を容易に移入できた。そのような中で、イギリスの音楽もまた、ヨーロッパの他の国々とは違った独自性も持っており、その独自性がどのように形づくられているかを考える。					
後期 音楽と絵画との間には何らかのつながりがあるとしばしば考えられながら、そのつながりを的確に説明することは容易ではない。主に19世紀のヨーロッパにおける音楽と絵画との相互影響の事例を検討することを通して、音楽と絵画との関係について考える。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
常に音楽の実感を持ちながら考えること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
期末レポート			100		
教科書情報					
教科書1	使用しない。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業時に適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					

特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	エドワード・エルガー(1)「エニグマ」変奏曲、《ジェロントシアスの夢》を中心に
2	エルガー(2)《戴冠式頌歌》、交響曲を中心に
3	レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ(1)交響曲を中心に
4	ヴォーン＝ウィリアムズ(2)交響曲およびそれ以外の曲に関して
5	ルネサンス期のイギリス音楽(1)ジョン・ダンスタブルを中心に
6	ルネサンス期のイギリス音楽(2)トマス・タリス、ロバート・ホワイト、ウィリアム・バード
7	ルネサンス期のイギリス音楽とバロック期のイギリス音楽 バード、オーランド・ギボンズ
8	イギリスにおけるキリスト教と音楽 バロック期のイギリス音楽 ヘンリー・パーセル(1)
9	パーセル(2)、イギリス古典音楽の復興
10	グスターヴ・ホルスト(1) 民族音楽 神秘思想
11	ホルスト(2)《日本組曲》《惑星》《イエスの讃歌》《エグドン荒野》
12	第一次世界大戦後のイギリス音楽(1)アーサー・ブリス 《マダム・ロイ》《ラプソディ》《色彩交響曲》
13	第一次世界大戦後のイギリス音楽(2)コンスタント・ランバート、ウィリアム・ウォルトン
14	ベンジャミン・ブリテン(1)
15	ブリテン(2)およびイギリスのいわゆる現代音楽(マイケル・ティペット、エリザベス・リュティンズなど)
16	エドヴァルド・ムンクの『叫び』を出発点として、表現主義の絵画、印象主義の絵画、表現主義の音楽、印象主義の音楽について。
17	ムンクの『叫び』の中の音楽的なものと共感覚について。
18	サン＝サーンスの交響詩《オンファールの糸車》を中心として、標題音楽と絵画との関係について。
19	アルノルト・ベックリンの『死の島』による交響詩を中心として、標題音楽と絵画との関係について。
20	フランティシェック・クプカを中心として、抽象画と音楽との関係について。
21	抽象画とオルフィスム
22	ヴァシリー・カンディンスキーを中心として、抽象画と音楽との関係について。
23	パウル・クレーが絵画に用いた音楽的手法(1)特に時間に関して
24	同(2)特にポリフォニーに関して
25	オットリーノ・レスピーギの《ボッティチェルリの三連画》を中心として、絵画のイメージを持って音楽を聴くことについて。(1)サンドロ・ボッティチェルリの『プリマヴェーラ』
26	同(2)『東方三博士の礼拝』
27	同(3)『ヴィーナスの誕生』
28	モデスト・ムソルグスキーの《展覧会の絵》
29	マルク・シャガールのステンド・グラスによる音楽
30	諸芸術の収斂

科目名	音楽学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	前川 陽郁				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>前期 「イギリス音楽におけるイギリス的なもの」というテーマで、イギリス音楽の独自性について考える。</p> <p>後期 「音楽と絵画」というテーマで、この二つのジャンル間の相互影響について考える。</p>					
授業概要					
<p>前期 イギリスは、大陸のヨーロッパ諸国ほど相互に侵略することがなかった一方で、大陸諸国の文化を容易に移入できた。イギリスの音楽もまた、ヨーロッパの他の国々とは違った独自性も持っており、その独自性がどのように形づくられているかを考える。</p> <p>後期 音楽と絵画との間には何らかのつながりがあるとしばしば考えられながら、そのつながりを的確に説明することは容易ではない。主に19世紀のヨーロッパにおける音楽と絵画との相互影響の事例を検討することを通して、音楽と絵画との関係について考える。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
常に音楽の実感を持ちながら考えること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
期末レポート			100		
教科書情報					
教科書1	使用しない。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業時に適宜紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					



特記事項	
教員実務経験	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	エドワード・エルガー(1)「エニグマ」変奏曲、《ジェロントシアスの夢》を中心に
2	エルガー(2)《戴冠式頌歌》、交響曲を中心に
3	レイフ・ヴォーン＝ウィリアムズ(1)交響曲を中心に
4	ヴォーン＝ウィリアムズ(2)交響曲およびそれ以外の曲に関して
5	ルネサンス期のイギリス音楽(1)ジョン・ダンスタブルを中心に
6	ルネサンス期のイギリス音楽(2)トマス・タリス、ロバート・ホワイト、ウィリアム・バード
7	ルネサンス期のイギリス音楽とバロック期のイギリス音楽 バード、オーランド・ギボンズ
8	イギリスにおけるキリスト教と音楽 バロック期のイギリス音楽 ヘンリー・パーセル
9	パーセル、イギリス古典音楽の復興
10	グスターヴ・ホルスト(1)民族音楽 神秘思想
11	ホルスト(2)《日本組曲》《惑星》《イエスの讃歌》《エグドン荒野》
12	第一次世界大戦後のイギリス音楽(1)アーサー・ブリス《マダム・ロイ》《ラプソディ》《色彩交響曲》
13	第一次世界大戦後のイギリス音楽(2)コンスタント・ランバート、ウィリアム・ウォルトン
14	ベンジャミン・ブリテン(1)
15	ブリテン(2)およびイギリスのいわゆる現代音楽(マイケル・ティペット、エリザベス・リュティンズなど)
16	エドヴァルド・ムンクの『叫び』を出発点として、表現主義の絵画、印象主義の絵画、表現主義の音楽、印象主義の音楽について。
17	ムンクの『叫び』の中の音楽的なものと共感覚について。
18	サン＝サーンスの交響詩《オンファールの糸車》を中心として、標題音楽と絵画との関係について。
19	アルノルト・ベックリンの『死の島』による交響詩を中心として、標題音楽と絵画との関係について。
20	フランティシェック・クプカを中心として、抽象画と音楽との関係について。
21	抽象画とオルフィスム
22	ヴァシリー・カンディンスキーを中心として、抽象画と音楽との関係について。
23	パウル・クレーが絵画に用いた音楽的手法(1)特に時間に関して
24	同(2)特にポリフォニーに関して
25	オットリーノ・レスピーギの《ボッティチェルリの三連画》を中心として、絵画のイメージを持って音楽を聴くことについて。(1)サンドロ・ボッティチェルリの『プリマヴェーラ』
26	同(2)『東方三博士の礼拝』
27	同(3)『ヴィーナスの誕生』
28	モデスト・ムソルグスキーの《展覧会の絵》
29	マルク・シャガールのステンド・グラスによる音楽
30	諸芸術の収斂

科目名	工芸特殊研究Ⅲ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	舘 正明				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>染織には布を染める「染め」と、糸を織る「織り」がある。多くの場合、そのどちらにも染色の工程が介在しているが、染色は染めるだけでは成立しない。その対極にある染めない部分をいかに作るかが重要であり、これを防染と言う。防染を行うには様々なプロセス、素材や技法を必要とする。この授業では素材や技法との対話やプロセスで生まれる新しい染色表現の探求を目的とし、染色分野の理解と各自の専門分野への新しいアプローチの発見が目標である。</p>					
授業概要					
<p>防染に用いられる素材の代表であるろうと糊に注目し、それぞれの特性や技法などを演習によって体験し、各自の作品へ展開する。 また、現代の染織作品や染織界の動向などについて適宜、資料などで紹介する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>身の回りに溢れる染織品に目を向け、染織分野と人との密接さを感じて欲しい。新しいもの、古いもの、専門分野の枠にとらわれず美術館、ギャラリーへ出向き、視野を広げること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
提出課題・作品			70		
プレゼンテーション			30		
教科書情報					
教科書1	適宜資料等を配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	染めを学ぶ				
出版社名	角川書店	著者名	福本繁樹・柳楽剛・舘正明他		
参考書名2	21世紀は工芸がおもしろい				
出版社名	求龍堂	著者名	福本繁樹編著		
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
{舘 正明 HP, <a href="https://tatemasaaki.jimdofree.com/">https://tatemasaaki.jimdofree.com/</a> }					
特記事項					

教員実務経験	
染色家の教員が制作、発表で得た知見を生かし染色表現の技法について指導する。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業説明、担当教員によるプレゼンテーション
2	受講生によるプレゼンテーション
3	布を染める1 準備 布を張る 道具の使い方 地入れ
4	布を染める2 染色 染料の特性を知る
5	布を染める3 仕上げ 蒸し
6	布を染める4 仕上げ 水元
7	ろうによる防染を考える1 講義 ろう染めについて
8	ろうによる防染を考える2 染色 染料の滲みを生かして
9	ろうによる防染を考える3 防染 ろうを置く
10	ろうによる防染を考える4 仕上げ 脱ろうソーピング
11	技法研究1-1 パティック 試作・デザイン
12	技法研究1-2 パティック ろう置き
13	技法研究1-3 パティック 藍染め
14	技法研究1-4 パティック 仕上げ 脱ろうソーピング
15	合評
16	糊による防染を考える1 講義 型染めについて
17	糊による防染を考える2 糊置き
18	糊による防染を考える3 地入れ 技法研究2-1 筒描き 試作・デザイン
19	糊による防染を考える4 染色
20	糊による防染を考える5 染料定着、糊落し
21	技法研究2-2 筒描き 糊置き
22	技法研究2-3 筒描き 染色

23	技法研究2-4 筒描き 仕上げ 糊落し・水元
24	合評 防染による染色布の制作1 染色作品制作に向けての計画発表
25	防染による染色布の制作2 各自の計画により制作を進める
26	防染による染色布の制作3 各自の計画により制作を進める
27	防染による染色布の制作4 各自の計画により制作を進める
28	防染による染色布の制作5 各自の計画により制作を進める
29	防染による染色布の制作6 各自の計画により制作を進める
30	プレゼンテーション・合評

科目名	デザイン特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	大平 弘				
クラス名					

#### 授業目的と到達目標

ビジュアルコミュニケーションを目的としたグラフィックデザインは、メディア・社会環境によって手法や技術が変化します。各自の研究課題を基本におき、完成度の高い作品制作を目的にします。感覚的造形表現(独自性)とビジュアルコミュニケーションの関係を考察し、計画的な考え方やアイデアを探り、豊かな感性と個性で表現するイラストレーター・グラフィックデザイナーの育成を目標にします。

#### 授業概要

題材『本』。自身の本を考えてみる。あなたにとって本とはなにか。  
各自の研究課題を基本に社会性をもった完成度の高い作品を目的にします。  
①造形制作(表現技術)と②グラフィックデザイン(視覚伝達/計画的な考え方)の2つの視点からイラストレーション・グラフィックアート作品として計画的に考え、アイデアを探り、感性豊かな独創性のある作品を完成させる。  
①造形表現/資料収集、アイデアの検討、表現技法の研究、試作、修正、改善を繰り返し作品を完成させる。  
②視覚伝達/①で制作した作品を客観的視点にたち撮影し、意図を再確認

#### 準備学修(予習・復習)・受講上の注意

オリジナリティ(独自性)のある作品制作には制作手法の決定のまえに、他領域の表現技法やグラフィックデザイン手法を知る必要があります。さまざまなポスターや書籍などを見ること。多くの作品がどのように制作され、展示(美術展/会場案内など。ショールーム、店舗・商品展示など、それに関連するDM/フライヤー/パッケージなどアイテム)されているのか確認し資料収集・ファイリングは必須です。

#### 成績評価方法・基準

種別	割合(%)
受講態度・積極的研究参加	50
制作課題による評価	50

#### 教科書情報

教科書1		
出版社名		著者名
教科書2		
出版社名		著者名
教科書3		
出版社名		著者名

#### 参考書情報

参考書名1		
出版社名		著者名
参考書名2		
出版社名		著者名
参考書名3		
出版社名		著者名
参考書名4		
出版社名		著者名
参考書名5		

出版社名		著者名	
参考 URL			
特記事項			
教員実務経験			
グラフィックデザインの実務と造形作家としての視点から、作品制作の方法や視覚伝達の技術を指導する。			
授業計画(各回予定)			
授業回	授業内容		
1	●課題説明 ① 課題 『本の形』展出品作品制作 ② 課題 B2 サイズ展覧会告知ポスター ③ 課題 ロゴタイプの制作		
2	資料収集_見つける・調べる 『本の形』展出品作品の形態・材料を探る 形・形態／材質・材料		
3	本の試作_検討・深める 形態の提案・検討		
4	本の試作_改良・考えをまとめる 形態と効果の検討・改善 ロゴタイプ案持参(A4 サイズ)		
5	本の試作_改良・考えをまとめる 形態の決定／●実寸サイズの試作プレゼンテーション		
6	作品制作(報告)		
7	作品制作(報告)		
8	作品制作(報告)		
9	完成作品制作(報告_検討、●中間プレゼンテーション)		
10	完成作品制作(報告_改善)		
11	●冊子の完成／プレゼンテーション／合評		
12	作品撮影_ポスター素材として作品を見る「この本の造形的特徴はどこにあるのか」		
13	●B2 サイズポスターの試作／検討_『本の形』展 B2 サイズポスター／実寸試作(A3 サイズ貼り合わせ可) 画面構成、文字構成、ロゴタイプの検討・改善		
14	B2 ポスターの試作／改善_『本の形』展 B2 ポスター／実寸試作(A3 サイズ貼り合わせ可) ロゴタイプ(完成作)・基本データを入れた状態で持参。		
15	●B2 サイズポスターの完成_2 作品『本の形』展 B2 サイズポスター(ハレパネ貼り／展示)		
16	後期●課題説明 ① 課題_会場設営の計画(サイン計画含む) ② 課題_会場配布用_冊子の制作		
17	資料収集_見つける・調べる 空間の確認、冊子資料収集		
18	冊子の試作_検討 サイズと形態、紙・素材の検討		
19	冊子の試作_検討・深める レイアウト案の作成		
20	冊子の試作_改良・考えをまとめる レイアウトの確認／●実寸サイズの試作プレゼンテーション		
21	作品制作(報告)		

22	作品制作(報告)
23	作品制作(報告)
24	完成作品制作(報告_検討、●中間プレゼンテーション)
25	完成作品制作(報告_改善)
26	●冊子の完成/プレゼンテーション/合評
27	提案_会場設営の計画(ガラス面、サイン計画含む)
28	検討_会場設営の計画(ガラス面、サイン計画含む)
29	改善_会場設営の計画(サイン計画含む)
30	<p>●プレゼンテーション</p> <p>前期</p> <p>① 課題 『本の形』展出品作品制作</p> <p>② 課題 B2 サイズ展覧会告知ポスター</p> <p>③ 課題 ロゴタイプの制作後期</p> <p>④ 課題 会場設営の計画(サイン計画含む)</p> <p>⑤ 課題 会場配布用冊子</p> <p>①～⑤を A4 ファイルにまとめ提出_後期授業終了時</p>

科目名	文芸学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	団野 恵美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
この授業では、英国の風土や歴史を基にしながら、社会文化や風俗習慣、人々の日常生活を図版や映像を使って紹介していく。日本の文化と比較しながら、様々なトピックについて小説を読んだり映画を見ることでイギリス文学の背景を知る。					
授業概要					
毎回ハンドアウトを配布し、あるテーマにそってイギリスの文化と文学を理解する知識を学ぶ。英国といえばアフタヌーン・ティーやピーター・ラビットがすぐ浮かぶが、この紅茶の伝統も、本はといえば中国や日本の茶から始まったこと、あのかわいいピーター・ラビットは英国の自然環境を守るナショナル・トラストの影の功労者となっていること、ハリー・ポッターには英国の教育制度が色濃く現れていることなどが分かるだろう。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
授業時に、読むべき小説や映画、参考文献などを紹介するので、様々な文学作品に触れることが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業貢献度			70		
授業内発表			30		
教科書情報					
教科書1	毎回授業時にハンドアウトを配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業時に指示する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					



授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス: 英国は1つなのか? イングランド、ウェールズ、スコットランドと北アイルランドのお話
2	イギリスのファッション(1) 贅沢禁止法とファッションの流行を歴史的に考察する
3	イギリスのファッション(2) イギリス 16 世紀にプロジェクトXを立ち上げた貴族たち
4	教育制度とハリー・ポッター ハリーたちが勉強した寮生活とは
5	英国王室と王の結婚 ノルマン人による征服から始まる王家の歴史について
6	王室の歴史
7	ナショナル・トラストとピーター・ラビット 自然を保護するために購入するという考え
8	英国料理は不味いのか ヘンリー8 世が食べていたもの
9	料理と小説 イギリス流食事風景
10	イギリスのスポーツ(1) 登山、ボート、テニス、釣り...すべてスポーツ
11	イギリスのスポーツ(2)
12	イギリスの医療と福祉 病院の成り立ち
13	イギリス映画と文化表象 イギリス人の暮らしがわかる映画
14	イギリス小説あれこれ
15	まとめ
16	ガイダンス: 前期の復習と後期の内容
17	絵画からみる文化
18	イギリス人にとっての肖像画 肖像画は何を伝えようとしているのか
19	パブの文化 ビールの歴史
20	紅茶とイギリス文化(1) アフタヌーンティ
21	紅茶とイギリス文化(2)
22	イギリス映画
23	イングリッシュ・ガーデンの歴史(1) 庭園と文学、絵画のつながり
24	イングリッシュ・ガーデンの歴史(2)
25	ヴィクトリア朝とシャーロック・ホームズ 探偵小説の舞台
26	イギリス演劇とシェイクスピア
27	エリザベス朝の文化
28	イギリスの児童文学(1)
29	イギリスの児童文学(2)
30	まとめ

科目名	文芸学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	団野 恵美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
この授業では、英国の風土や歴史を基にしなが、社会文化や風俗習慣、人々の日常生活を図版や映像を使って紹介していく。日本の文化と比較しながら、様々なトピックについて小説を読んだり映画を見ることでイギリス文学の背景を知る。					
授業概要					
毎回ハンドアウトを配布し、あるテーマにそってイギリスの文化と文学を理解する知識を学ぶ。英国といえばアフタヌーン・ティーやピーター・ラビットがすぐ浮かぶが、この紅茶の伝統も、本はといえば中国や日本の茶から始まったこと、あのかわいいピーター・ラビットは英国の自然環境を守るナショナル・トラストの影の功労者となっていること、ハリー・ポッターには英国の教育制度が色濃く現れていることなどが分かるだろう。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
授業時に、読むべき小説や映画、参考文献などを紹介するので、様々な文学作品に触れることが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題レポート			70		
授業内発表			30		
教科書情報					
教科書1	テキストは使わず、ハンドアウトを配布する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	前期参照
2	前期参照
3	前期参照
4	前期参照
5	前期参照
6	前期参照
7	前期参照
8	前期参照
9	前期参照
10	前期参照
11	前期参照
12	前期参照
13	前期参照
14	前期参照
15	前期参照
16	ガイダンス: 前期の復習と後期の学習について
17	絵画からみる文化
18	イギリス人にとっての肖像画 肖像画は何を伝えようとしているのか
19	パブの文化 ビールの歴史
20	紅茶とイギリス文化(1) アフタヌーンティ
21	紅茶とイギリス文化(2)
22	イギリス映画
23	イングリッシュ・ガーデンの歴史(1) 庭園と文学、絵画のつながり
24	イングリッシュ・ガーデンの歴史(2)
25	ヴィクトリア朝とシャーロック・ホームズ 探偵小説の舞台
26	イギリス演劇とシェイクスピア
27	エリザベス朝の文化
28	イギリスの児童文学(1)
29	イギリスの児童文学(2)
30	後期のまとめ

科目名	文学創作特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	玄 月				
クラス名					
授業目的と到達目標					
タイプの違ういくつかの短編小説の構造分析を行い、文体、構成を研究する。批評眼を養う。					
授業概要					
これまで漫然と読んできたであろう小説から、視点、文体、構成、長所、欠点、作者の癖などを洗い出し、詳しく分析する。そこで得た「小説の技法」を元に、受講生各自が既存の短編の構造分析を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
読む・書くだけでなく、人の話をよく聞き、理解すること。指定された本は精読すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題はすべて提出。主体的な授業参加 3 分の 2 以上			100		
教科書情報					
教科書 1					
出版社名		著者名			
教科書 2					
出版社名		著者名			
教科書 3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名 1					
出版社名		著者名			
参考書名 2					
出版社名		著者名			
参考書名 3					
出版社名		著者名			
参考書名 4					
出版社名		著者名			
参考書名 5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
芥川賞作家としての経験を活かし、創作技法や批評眼を習得させる。					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	一年間の授業概要とスケジュールの説明。				

2	教授による短編小説の構造分析。	
3	教授による短編小説の構造分析。	
4	教授による短編小説の構造分析。	
5	教授による短編小説の構造分析。	
6	教授による短編小説の構造分析。	
7	教授による短編小説の構造分析。	
8	教授による短編小説の構造分析。	
9	教授による短編小説の構造分析。	
10	教授による短編小説の構造分析。	
11	教授による短編小説の構造分析。	
12	教授による短編小説の構造分析。	
13	院生による短編小説の構造分析。	
14	院生による短編小説の構造分析。	
15	院生による短編小説の構造分析。	
16	教授による短編小説の構造分析。	
17	教授による短編小説の構造分析。	
18	教授による短編小説の構造分析。	
19	教授による短編小説の構造分析。	
20	教授による短編小説の構造分析。	
21	教授による短編小説の構造分析。	
22	教授による短編小説の構造分析。	
23	教授による短編小説の構造分析。	
24	教授による短編小説の構造分析。	
25	教授による短編小説の構造分析。	
26	教授による短編小説の構造分析。	
27	教授による短編小説の構造分析。	
28	院生による短編小説の構造分析。	
29	院生による短編小説の構造分析。	
30	院生による短編小説の構造分析。	

科目名	文学創作特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	玄 月				
クラス名					
授業目的と到達目標					
タイプの違ういくつかの短編小説の構造分析を行い、文体、構成を研究する。批評眼を養う。					
授業概要					
これまで漫然と読んできたであろう小説から、視点、文体、構成、長所、欠点、作者の癖などを洗い出し、詳しく分析する。 そこで得た「小説の技法」を元に、受講生各自が既存の短編の構造分析を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
読む・書くだけでなく、人の話をよく聞き、理解すること。指定された本は精読すること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題はすべて提出。主体的な授業参加 3 分の 2 以上			100		
教科書情報					
教科書 1					
出版社名		著者名			
教科書 2					
出版社名		著者名			
教科書 3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名 1					
出版社名		著者名			
参考書名 2					
出版社名		著者名			
参考書名 3					
出版社名		著者名			
参考書名 4					
出版社名		著者名			
参考書名 5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
芥川賞作家としての経験を活かし、創作技法や批評眼を習得させる。					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				

1	一年間の授業概要とスケジュールの説明。	
2	教授による短編小説の構造分析。	
3	教授による短編小説の構造分析。	
4	教授による短編小説の構造分析。	
5	教授による短編小説の構造分析。	
6	教授による短編小説の構造分析。	
7	教授による短編小説の構造分析。	
8	教授による短編小説の構造分析。	
9	教授による短編小説の構造分析。	
10	教授による短編小説の構造分析。	
11	教授による短編小説の構造分析。	
12	教授による短編小説の構造分析。	
13	院生による短編小説の構造分析。	
14	院生による短編小説の構造分析。	
15	院生による短編小説の構造分析。	
16	教授による短編小説の構造分析。	
17	教授による短編小説の構造分析。	
18	教授による短編小説の構造分析。	
19	教授による短編小説の構造分析。	
20	教授による短編小説の構造分析。	
21	教授による短編小説の構造分析。	
22	教授による短編小説の構造分析。	
23	教授による短編小説の構造分析。	
24	教授による短編小説の構造分析。	
25	教授による短編小説の構造分析。	
26	教授による短編小説の構造分析。	
27	教授による短編小説の構造分析。	
28	院生による短編小説の構造分析。	
29	院生による短編小説の構造分析。	
30	院生による短編小説の構造分析。	

科目名	文芸学・演劇学研究演習	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	団野 恵美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
各個人が学術的興味を抱いた領域の中で、テーマを設定し、修士論文を作成する。					
授業概要					
学術論文を書くための技術を身につけ、専門領域の中からテーマ選びをして、論文を仕上げるまでを指導する。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
修士論文執筆の学生は、原稿チェックを受けながら論文の完成を目指すこと。1年生は専門領域のテーマにそって、先行研究を調査し、その成果を発表できるようにすること。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題提出			70		
個人発表			30		
教科書情報					
教科書1	学生各々のテーマに応じて指導する				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					
授業回	授業内容				
1	ガイダンス:各個人の研究分野について発表・相談				



2	論文とはどういうものか
3	図書館の利用、資料収集について
4	専門領域における論文のテーマ決定
5	各個人について、論文のテーマのための読書リスト作り
6	文献引用について、原稿の書き方など
7	論文の章立て
8	論文チェック
9	論文チェック
10	中間発表:各個人が執筆中の論文について発表をする
11	論文チェック
12	論文チェック
13	論文チェック
14	論文チェック
15	前期論文提出
16	前期提出の論文について返却と講評
17	新しい視点と調査について
18	論文を仕上げるまでの計画
19	論文執筆しながらの研究について
20	論文チェック
21	論文チェック
22	論文チェック
23	論文チェック
24	論文チェック
25	論文チェック
26	論文チェック
27	グループ内で論文発表
28	論文チェック
29	論文最終チェック
30	後期論文提出

科目名	作曲特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	志村 哲				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>古代から継承される日本の伝統音楽と、今日の日本楽器を用いた種々の作品および、電気・電子技術、コンピュータ等を利用した音楽創作を中心に、音楽創造における多種多様な音楽制作の手法を、日本の伝統技術という枠組みから考察する。また、音響・映像機器、新世代楽器、IT との関わりについても考察する。洋の東西を問わず、あらゆる楽器において、音楽と楽器（道具）との関わりを実践的に追究するアプローチの方法を学ぶ。また「美術と音楽」「建築と音楽」「映像と音楽」「文学と音楽」など、音楽以外の領域の履修者の専門領域との関わりについて</p>					
授業概要					
<p>前半は日本音楽における歴史的な作品をテーマに、記譜法、楽器と奏法、演奏の場(社会)等の諸側面から特徴を考察する。次に日本の音楽界の現状を扱い、作曲家、演奏家、聴衆等について多角的に検討する。その後、受講生各自の研究課題に関わり、現代の日本音楽、国際的に様々な音楽種目に用いられる日本楽器の様相、メディア、コンピュータとの結び付き、ポピュラー音楽等から幾つかの事例を取り上げる。音楽領域に留まるのではなく、他領域の受講生の参加を強く求め、芸術・文化・社会について多角的に議論したい。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>文化的側面において急速に国際化が進む時代であるからこそ、日本音楽に関して、歴史と音楽の種類、文化的、地域的背景の理解に努めるとともに、日常的に好奇心を高めること。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業に取り組む姿勢			40		
研究発表			30		
最終課題			30		
教科書情報					
教科書1	適宜プリント配布				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	CD コレクションシリーズ 39「地無し尺八の可能性」解説書				
出版社名	浜松: 浜松市楽器博物館	著者名	志村哲		
参考書名2	『事典 世界音楽の本』				
出版社名	東京: 岩波書店	著者名	志村哲、他(共著)		
参考書名3	『古管尺八の楽器学』				
出版社名	東京: 出版芸術社	著者名	志村哲		
参考書名4	『コンピュータと音楽の世界』				
出版社名	東京: 共立出版	著者名	志村哲、他(共著)		
参考書名5					
出版社名		著者名			

参考 URL	
特記事項	
教員実務経験	
<p>本科目の参考書の執筆者であり、他にも学術書、レコード解説等を多数執筆している。日本楽器「尺八」の音楽学／楽器学的研究で、博士(学術)の学位を取得した。また、コンピュータ音楽の創作(国際コンピュータ音楽会議に2回入選を含む)、尺八演奏家(国際尺八フェスティバルでは毎回、招待演奏家として出演)等、テクノロジーと日本伝統音楽を融合させるアーティストとして活躍しているので、音に留まらず、音楽と他の芸術との接点や、創作におけるものの考え方の共通性、個性についての議論ができる。</p>	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	はじめに:日本の音楽研究における歴史的視点と科学的アプローチの諸領域について
2	楽器の種類と音楽1:日本の古代、中世の音楽と歴史的尺八(雅楽尺八、一節切、天吹)
3	楽器の種類と音楽2:作曲者のない150曲の虚無僧尺八(古典本曲)
4	楽器の種類と音楽3:演奏できなければ作れない三曲合奏
5	楽器の種類と音楽4:箏における楽器の歴史と記譜法、演奏技法
6	楽器の種類と音楽5:箏における楽器の改造と現代的展開～宮城道雄の発想～
7	楽器の種類と音楽6:三味線音楽のひろがり～三味線はひとつではなく、非常にたくさんの種類がある～
8	楽器の種類と音楽7:日本楽器における種々の分類法
9	楽器の種類と音楽8:近代における日本楽器改造の思想と音楽～オークラウロの諸問題～
10	楽器の種類と音楽9:現代邦楽ブームとは何だったのか?
11	日本楽器の国際化の諸相
12	コンピュータ科学やテクノロジーを応用した日本音楽の追究～Cyber尺八:人間とコンピュータとの協調あるいは、対峙～
13	西洋的電子楽器と日本的電子楽器についての考察～電子邦楽器開発の歴史と今後の可能性～
14	音楽作品上演におけるVR(ヴァーチャル・リアリティ)と真実との関係あるいは、現実的な作品の位置づけについて～演奏家はこれからも必要?～
15	前期の総括とディスカッション
16	後期のはじめに:日本社会における音楽・音楽家と、日本の楽器の現状について
17	今日の日本音楽の特徴1:日本楽器製作者とそれを支える社会
18	今日の日本音楽の特徴2:日本伝統音楽の伝承・教育・継承者について
19	日本音楽のためのDTM(デスクトップ・ミュージック)システム
20	音楽資料の歴史的保存のための情報収集・分析と発信～IT社会のための情報音楽Web博物館の未来～
21	受講生各自の研究テーマに則った課題設定1
22	受講生各自の研究テーマに則った課題設定2
23	研究発表とディスカッション(受講生の人数、テーマにより詳細を確定)
24	研究発表とディスカッション(受講生の人数、テーマにより詳細を確定)
25	研究発表とディスカッション(受講生の人数、テーマにより詳細を確定)
26	研究発表とディスカッション(受講生の人数、テーマにより詳細を確定)
27	プレゼンテーションと講評
28	プレゼンテーションと講評

29	未来の予測、あるいは期待(レクチャーとディスカッション)
30	課題の完成、提出と総評

科目名	工芸特殊研究Ⅳ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	木下 良輔				
クラス名					
授業目的と到達目標					
ガラス工芸についての基本理解とガラス技法の体験学習を通して、各学生の専門領域とガラスとの新たな関わりを模索する。幅広くガラスについての知識を得るとともに、グローバルな考えを持って活躍の場が広がることを期待する。					
授業概要					
ガラス素材の歴史の変遷、技法、それに伴う機械や設備、道具と材料等々について、演習を通して理解する。各自の専門領域に基づく新たなガラスの提案を形にし、展示発表を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
素材としてのガラスの特徴をとらえることに最大限の関心を持つこと。既成の概念と常識にとらわれずに、自分の感性でガラスを感じて欲しい。考察レポート作成のためのスケッチや記録撮影を随時行うこと。第15回の考察記録の提出とプレゼンテーション、及び、第30回の作品展示発表とプレゼンテーションは必修。材料費が必要となります。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
プレゼンテーション			25		
レポート			25		
提案作品			25		
受講姿勢			25		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	コールドワークテキスト				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名2	パート・ド・ヴェールの技法				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名3	世界ガラス工芸史				
出版社名	美術出版社	著者名	中山公男		
参考書名4	吹きガラステキスト				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
ガラス造形作家	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス／年間授業説明
2	教員と指導スタッフによるプレゼンテーション
3	履修者のプレゼンテーション
4	体験授業1 ホットワーク1
5	体験授業2 ホットワーク2
6	体験授業3 バーナーワーク
7	体験授業4 キルンワーク1
8	体験授業5 キルンワーク2
9	体験授業6 キルンワーク3
10	体験授業7 コールドワーク1
11	体験授業8 コールドワーク2
12	体験授業9 コールドワーク3
13	作業予備日
14	作業予備日
15	前期講評会 / 課題提出日
16	後期課題説明
17	個別指導
18	後期課題プレゼンテーション1
19	後期課題プレゼンテーション2
20	制作
21	制作
22	制作
23	制作
24	中間発表
25	制作
26	制作
27	制作
28	制作
29	後期講評会
30	課題提出日

科目名	工芸特殊研究Ⅳ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	木下 良輔				
クラス名					
授業目的と到達目標					
ガラス工芸についての基本理解とガラス技法の体験学習を通して、各学生の専門領域とガラスとの新たな関わりを模索する。幅広くガラスについての知識を得るとともに、グローバルな考えを持って活躍の場が広がることを期待する。					
授業概要					
ガラス素材の歴史的変遷、技法、それに伴う機械や設備、道具と材料等々について、演習を通して理解する。各自の専門領域に基づく新たなガラスの提案を形にし、展示発表を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
素材としてのガラスの特徴をとらえることに最大限の関心を持つこと。既成の概念と常識にとらわれずに、自分の感性でガラスを感じて欲しい。考察レポート作成のためのスケッチや記録撮影を随時行うこと。第15回の考察記録の提出とプレゼンテーション、及び、第30回の作品展示発表とプレゼンテーションは必修。材料費が必要になります。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
プレゼンテーション			25		
レポート			25		
提案作品			25		
受講姿勢			25		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	コールドワークテキスト				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名2	パート・ド・ヴェールの技法				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名3	世界ガラス工芸史				
出版社名	美術出版社	著者名	中山公男		
参考書名4	吹きガラステキスト				
出版社名	東京ガラス工芸研究所	著者名	東京ガラス工芸研究所編		
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					

教員実務経験	
ガラス造形作家	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	ガイダンス／年間授業説明
2	教員と指導スタッフによるプレゼンテーション
3	履修者のプレゼンテーション
4	体験授業1 ホットワーク1
5	体験授業2 ホットワーク2
6	体験授業3 バーナーワーク
7	体験授業4 キルンワーク1
8	体験授業5 キルンワーク2
9	体験授業6 キルンワーク3
10	体験授業7 コールドワーク1
11	体験授業8 コールドワーク2
12	体験授業9 コールドワーク3
13	作業予備日
14	作業予備日
15	前期講評会 / 課題提出日
16	後期課題説明
17	個別指導
18	後期課題プレゼンテーション1
19	後期課題プレゼンテーション2
20	制作
21	制作
22	制作
23	制作
24	中間発表
25	制作
26	制作
27	制作
28	制作
29	後期講評会
30	課題提出日



科目名	演奏特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 前期	形態	演習		
教員名	今川 裕代				
クラス名					
授業目的と到達目標					
ピアノ協奏曲の起源と歴史を知り、主だった協奏曲を時代順に研究する。ウィーン古典派の協奏曲から 1~2 曲、ロマン派以降の協奏曲から 1~2 曲学び、オーケストラと楽曲を奏する際に必要な分析力や技術を養い、レパートリーとなるよう仕上げる。					
授業概要					
ピアノ2台形式で行う。協奏曲を演奏する際の表現方法、音の響かせ方を体得し、オーケストラや指揮者との息の合わせ方を学ぶ。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各々が研究する楽曲の分析、練習。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業に取り組む姿勢			60%		
テスト			40		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各々が研究する楽曲のオーケストラスコア譜、2台ピアノ譜				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
出席回数が全授業回数の 3 分の 2 以上に達しない場合は単位を付与しない。					
教員実務経験					
オーケストラとの豊富な共演経験を踏まえ、技術的問題、楽曲解釈における問題を討議、指導する。					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1年間の授業計画の説明。 協奏曲の起源を知り、様々な協奏曲を時代順に調べ、前期と後期に研究する楽曲を選び、3回目の授業までに譜読みをする。
2	前期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
3	各々が選曲した楽曲の1楽章
4	1楽章の続き
5	1楽章 カデンツを加えて
6	1楽章の仕上げ
7	2楽章
8	2楽章 仕上げ
9	終楽章
10	終楽章の続き
11	終楽章の仕上げ
12	選曲した楽曲のCD及びDVD鑑賞
13	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
14	全楽章の復習、仕上げ
15	全楽章の仕上げとテスト
16	ロマン派以降の協奏曲について 後期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
17	各々が選曲した楽曲の1楽章
18	1楽章の続き
19	1楽章 カデンツを加えて
20	1楽章の仕上げ
21	2楽章
22	2楽章の続き
23	2楽章の仕上げ
24	終楽章
25	終楽章の続き
26	終楽章の仕上げ
27	選曲した楽曲のCD及びDVD鑑賞
28	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
29	全楽章の復習、仕上げ
30	全楽章の仕上げとテスト

科目名	演奏特殊研究 I	年次	1	単位数	2
授業期間	2025 年度 後期	形態	演習		
教員名	今川 裕代				
クラス名					
授業目的と到達目標					
ピアノ協奏曲の起源と歴史を知り、主だった協奏曲を時代順に研究する。 ウィーン古典派の協奏曲から 1～2 曲、ロマン派以降の協奏曲から 1～2 曲学び、オーケストラと楽曲を奏する際に必要な分析力や技術を養い、レパートリーとなるよう仕上げる。					
授業概要					
協奏曲を演奏する際の表現方法、音の響かせ方を体得し、オーケストラや指揮者との息の合わせ方をピアノ 2 台形式で学ぶ。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
各々が研究する楽曲の分析、練習。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
授業に取り組む姿勢			60%		
テスト			40		
教科書情報					
教科書 1					
出版社名		著者名			
教科書 2					
出版社名		著者名			
教科書 3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名 1	各々が研究する楽曲のオーケストラスコア譜、2 台ピアノ譜				
出版社名		著者名			
参考書名 2					
出版社名		著者名			
参考書名 3					
出版社名		著者名			
参考書名 4					
出版社名		著者名			
参考書名 5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
出席回数が全授業回数の 3 分の 2 以上に達しない場合は単位を付与しない。					
教員実務経験					
オーケストラとの豊富な共演経験を踏まえ、技術的問題、楽曲解釈における問題を討議、指導する。					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	1年間の授業計画の説明。 協奏曲の起源を知り、様々な協奏曲を時代順に調べ、前期と後期に研究する楽曲を選び、3回目の授業までに譜読みをする。
2	前期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
3	各々が選曲した楽曲の1楽章
4	1楽章の続き
5	1楽章 カデンツを加えて
6	1楽章の仕上げ
7	2楽章
8	2楽章 仕上げ
9	終楽章
10	終楽章の続き
11	終楽章の仕上げ
12	選曲した楽曲のCD及びDVD鑑賞
13	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
14	全楽章の復習、仕上げ
15	全楽章の仕上げとテスト
16	ロマン派以降の協奏曲について 後期に研究する楽曲の背景、作曲家について調べる。
17	各々が選曲した楽曲の1楽章
18	1楽章の続き
19	1楽章 カデンツを加えて
20	1楽章の仕上げ
21	2楽章
22	2楽章の続き
23	2楽章の仕上げ
24	終楽章
25	終楽章の続き
26	終楽章の仕上げ
27	選曲した楽曲のCD及びDVD鑑賞
28	指揮者の視点から考察し、オーケストラパートを演奏する
29	全楽章の復習、仕上げ
30	全楽章の仕上げとテスト

科目名	演劇学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>受講者による演劇作品(映画・ミュージカル・オペラ等を含む)の研究発表と質疑応答をおこなう。          受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。          この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている</p>					
授業概要					
<p>受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。          取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。随時上演ビデオを利用する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらおう。          何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					



科目名	演劇学作品研究	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>受講者による演劇作品(映画・ミュージカル・オペラ等を含む)の研究発表と質疑応答をおこなう。          受講生の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。          この演習が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている。</p>					
授業概要					
<p>受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。          取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。          随時上演ビデオを利用する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>発表は、受講者それぞれの関心に即して行ってもらおう。          何に、どのような興味があるのか。よく探ってみて欲しい。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人の関心に応じて指導する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					





科目名	美術史学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	石井 元章				
クラス名					
授業目的と到達目標					
建学の精神の国際的視野に立って、本講は美術史学に必要な基礎知識を習得することを目的とする。図像学の基礎である文献(典拠)と図像の関係をしっかり押さえ、それに基づいて、一つの作品の特殊性を解明する訓練を行う。後期はヴェネツィア美術に関する文献を読む。					
授業概要					
[前期]美術史学の基礎の一つイコノグラフィーをギリシア・ローマの神話主題とキリスト教主題に関して考察する。 [後期]『西洋美術の歴史4 ルネサンスⅠ』第5章『絵画の発明』『ヴェネツィアのパトロネージ』『ヴェネツィア神話』					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
美術史学の基礎知識を習得すると同時に、先行研究論文の読み方もしっかりマスターしてほしい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
平常点		50			
レポート		50			
教科書情報					
教科書1	西洋美術の歴史4 ルネサンス1				
出版社名	中央公論新社	著者名	小佐野重利他		
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	西洋美術解説事典				
出版社名	河出書房新社	著者名	ジェイムズ・ホール		
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					

授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	オリエンテーション イコノグラフィーとイコノロジー ギリシア・ローマ神話主題とキリスト教主題
2	ウェヌスの変容 1 ギリシア神話のアフロディテの図像が裸婦、横臥像になる過程を追い、それがローマ神話の中でウェヌス図像として帝国内に広がっていく様子を理解する。
3	ウェヌスの変容 2 古代世界で形成された「横たわる裸婦」としてのウェヌス図像が、ルネサンス以降の美術の中でどのように受け継がれていくかを理解する。
4	ヘラクレスの変容 1 ギリシア・ローマ神話の中で、第一の英雄としてのヘラクレス図像を、十二神業を中心として理解する。
5	ヘラクレスの変容 2 ルネサンス以降の美術の中で、ヘラクレス図像がどのように援用されていくかを理解する。
6	ヴェネツィア神話の誕生 泥の中から生まれたヴェネツィア共和国が、自らを神話化していく過程を追う。
7	ヴェネツィア神話の変容 ヴェネツィアと正義、聖母マリアが重ねられる作例とその契機について学ぶ。
8	ヴェネツィア神話の完成 不可侵の処女としてのヴェネツィアとアストラエア、乙女座が重ねられる作例について学ぶ。
9	聖マルコの物語 1 本来の福音書記者聖マルコ伝を学ぶ。中世における図像の作例を理解する。
10	聖マルコの物語 2 トゥツリオ・ロンバルド作《総督ジョヴァンニ・モチエニーゴ記念碑》に見られる図像の問題点を指摘する。
11	聖マルコの物語 3 聖マルコとアニアヌスの図像がどのような変遷を辿るかを理解する。
12	ヴェネツィアの図像体系 1 ヴェネツィア共和国の中心であるサン・マルコ広場に込められた象徴的意味を理解する。サン・マルコ聖堂の図像について学ぶ。
13	ヴェネツィアの図像体系 2 サン・マルコ広場に込められた象徴的意味を理解する。総督宮殿について学ぶ。
14	ヴェネツィアの図像体系 3 サン・マルコ広場に込められた象徴的意味を理解する。新旧行政館、時計塔、ナポレオン翼などについて学ぶ。
15	学生発表とレポート提出
16	『絵画の発明』第一章、第二章
17	『絵画の発明』第三章
18	『絵画の発明』第四章
19	『絵画の発明』第五章
20	『ヴェネツィア神話』序説
21	『ヴェネツィア神話』第一章
22	『ヴェネツィア神話』第二章
23	『ヴェネツィア神話』第三章
24	『ヴェネツィア神話』第四章
25	『ヴェネツィアのパトロネージ』序章、第一章

26	『ヴェネツィアのパトロネージ』第二章
27	『ヴェネツィアのパトロネージ』第三章
28	『ヴェネツィアのパトロネージ』第四章
29	『ヴェネツィアのパトロネージ』第五章
30	『ヴェネツィアのパトロネージ』補論 1, 2

科目名	作曲特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
古典から現代までの管弦楽曲、オペラなどの分析を通じて、大編成の楽曲の構造を理解し、自らの作曲行為に生かしてゆく。					
授業概要					
授業は「対面授業」で行います。 具体的な作品を鑑賞・分析し、作品制作を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
色々な形態の音楽作品に常に親しみ、構造を理解するように努め、作曲への意欲を高めておくことが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
作品評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして、複数の旋律を同時に唱わせる方法を指導します。					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	管弦楽作品の鑑賞と分析 1
2	管弦楽作品の鑑賞と分析 2
3	管弦楽作品の鑑賞と分析 3
4	管弦楽作品の鑑賞と分析 4
5	管弦楽作品の鑑賞と分析 5
6	吹奏楽作品の鑑賞と分析 1
7	吹奏楽作品の鑑賞と分析 2
8	吹奏楽作品の鑑賞と分析 3
9	オペラの物語と音楽について
10	オペラの鑑賞と分析 1
11	オペラの鑑賞と分析 2
12	オペラの鑑賞と分析 3
13	オペラの鑑賞と分析 4
14	オペラの鑑賞と分析 5
15	オペラの鑑賞と分析 6
16	後期自由作曲について
17	作品制作、演習と添削
18	作品制作、演習と添削
19	作品制作、演習と添削
20	作品制作、演習と添削
21	作品制作、演習と添削
22	作品制作、演習と添削
23	作品制作、演習と添削
24	作品制作、演習と添削
25	作品制作、演習と添削
26	作品のプレゼンテーション
27	作品のプレゼンテーション
28	作品のプレゼンテーション
29	作品のプレゼンテーション
30	1年のまとめ

科目名	作曲特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	田中 久美子				
クラス名					
授業目的と到達目標					
古典から現代までの管弦楽曲、オペラなどの分析を通じて、大編成の楽曲の構造を理解し、自らの作曲行為に生かしてゆく。					
授業概要					
授業は「対面授業」で行います。 具体的な作品を鑑賞・分析し、作品制作を行う。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
色々な形態の音楽作品に常に親しみ、構造を理解するように努め、作曲への意欲を高めておくことが望ましい。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
作品評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1					
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
教員が国内外で多くの作品の楽譜出版、オペラ上演等されている作曲家としての経験を生かして、複数の旋律を同時に唱わせる方法を指導します。					
授業計画(各回予定)					

授業回	授業内容
1	管弦楽作品の鑑賞と分析 1
2	管弦楽作品の鑑賞と分析 2
3	管弦楽作品の鑑賞と分析 3
4	管弦楽作品の鑑賞と分析 4
5	管弦楽作品の鑑賞と分析 5
6	吹奏楽作品の鑑賞と分析 1
7	吹奏楽作品の鑑賞と分析 2
8	吹奏楽作品の鑑賞と分析 3
9	オペラの物語と音楽について
10	オペラの鑑賞と分析 1
11	オペラの鑑賞と分析 2
12	オペラの鑑賞と分析 3
13	オペラの鑑賞と分析 4
14	オペラの鑑賞と分析 5
15	オペラの鑑賞と分析 6
16	後期自由作曲について
17	作品制作、演習と添削
18	作品制作、演習と添削
19	作品制作、演習と添削
20	作品制作、演習と添削
21	作品制作、演習と添削
22	作品制作、演習と添削
23	作品制作、演習と添削
24	作品制作、演習と添削
25	作品制作、演習と添削
26	作品のプレゼンテーション
27	作品のプレゼンテーション
28	作品のプレゼンテーション
29	作品のプレゼンテーション
30	1年のまとめ

科目名	絵画特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度前期	形態	演習		
教員名	いしだ ふみ				
クラス名	版画研究				
授業目的と到達目標					
版画の歴史と版による表現の特色を、作家研究と版画制作等の演習を通して学ぶこと。 様々な版種における版構造、および表現の特色の違いを理解する。					
授業概要					
現代版画の源は20世紀、自画・自刻・自摺りの「創作版画」と共に始まったといえるだろう。 この授業では、版を表現手段にしてきた作家の研究と様々な版画の制作を通して、「版」を使用することの意味や今後の自己の制作上に「版」をどのように生かすことが出来るかを考える機会とする。また相互鑑賞を随時取り入れ、自分の作品への客観的な視点をもてるようにする。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
準備学修として、好きな版画家とその作品について資料を集めておく。 下絵が必要な版画制作の場合は予め準備する。 スケッチブック(クロッキー帳)、刷る紙等は原則持参のこと。銅板は実費が必要。 安全な制作、道具の片付け、作品の適切な保存に努める。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題提出作品、レポートの発表			80		
制作・相互鑑賞への姿勢、授業態度、授業への貢献度			20		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業の中で案内する				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
受講人数制限有り。受講希望者は授業初日に出席する事。					



教員実務経験	
教員が版画作家としての経験を活かし、シルクスクリーン・銅版画等の表現技法を指導する。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業概要説明と4版種の説明
2	モノタイプ制作 1
3	モノタイプ制作 2
4	シルクスクリーン制作—版下作成
5	シルクスクリーン制作—製版
6	シルクスクリーン制作—印刷
7	シルクスクリーン制作—印刷
8	シルクスクリーン制作—印刷・改版
9	モノタイプ作品・シルクスクリーン作品鑑賞, 合評
10	本学収蔵版画作品(浮世絵等)鑑賞
11	作家研究資料収集、発表資料準備
12	芸術を学ぶ者への問い
13	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 1
14	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 2
15	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 3
16	銅版画試作—銅版準備、防食材塗布
17	銅版画試作—間接法(描画・腐食)
18	銅版画試作—間接法(アクアチント・スピットバイト・腐食)
19	銅版画試作—印刷
20	銅版画制作—防食材塗布、版下転写
21	銅版画制作—描画
22	銅版画制作—腐食
23	銅版画制作—描画と腐食
24	銅版画制作—試刷1
25	銅版画制作—加筆と腐食
26	銅版画制作—加筆と腐食
27	銅版画制作—試刷2, 修正
28	銅版画制作—本刷
29	銅版画作品鑑賞・合評1
30	銅版画作品鑑賞・合評2, 授業の振り返りとまとめ

科目名	絵画特殊研究Ⅱ	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	演習		
教員名	いしだ ふみ				
クラス名	版画研究				
授業目的と到達目標					
版画の歴史と版による表現の特色を、作家研究と版画制作等の演習を通して学ぶこと。 様々な版種における版構造、および表現の特色の違いを理解する。					
授業概要					
現代版画の源は20世紀、自画・自刻・自摺りの「創作版画」と共に始まったといえるだろう。 この授業では、版を表現手段にしてきた作家の研究と様々な版画の制作を通して、「版」を使用することの意味 や今後の自己の制作上に「版」をどのように生かすことができるかを考える機会とする。また相互鑑賞を随時取 り入れ、自分の作品への客観的な視点をもてるようにする。					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
準備学修として、好きな版画家とその作品について資料を集めておく。 下絵が必要な版画制作の場合は予め準備する。 スケッチブック(クロッキー帳)、刷る紙等は原則持参のこと。銅板は実費が必要。 安全な制作、道具の片付け、作品の適切な保存に努める。					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
課題提出作品、レポートの発表			80		
制作・相互鑑賞への姿勢、授業態度、授業への貢献度			20		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	授業の中で案内する				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
受講人数制限有り。受講希望者は授業初日に出席する事。					

教員実務経験	
教員が版画作家としての経験を活かし、シルクスクリーン・銅版画等の表現技法を指導する。	
授業計画(各回予定)	
授業回	授業内容
1	授業概要説明と4版種の説明
2	モノタイプ制作 1
3	モノタイプ制作 2
4	シルクスクリーン制作—版下作成
5	シルクスクリーン制作—製版
6	シルクスクリーン制作—印刷
7	シルクスクリーン制作—印刷
8	シルクスクリーン制作—印刷・改版
9	モノタイプ作品・シルクスクリーン作品鑑賞, 合評
10	本学収蔵版画作品(浮世絵等)鑑賞
11	作家研究資料収集、発表資料準備
12	芸術を学ぶ者への問い
13	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 1
14	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 2
15	作家研究—版画作品の中から関心をもつ作家を選び, 研究発表・協議 3
16	銅版画試作—銅版準備、防食材塗布
17	銅版画試作—間接法(描画・腐食)
18	銅版画試作—間接法(アクアチント・スピットバイト・腐食)
19	銅版画試作—印刷
20	銅版画制作—防食材塗布、版下転写
21	銅版画制作—描画
22	銅版画制作—腐食
23	銅版画制作—描画と腐食
24	銅版画制作—試刷1
25	銅版画制作—加筆と腐食
26	銅版画制作—加筆と腐食
27	銅版画制作—試刷2, 修正
28	銅版画制作—本刷
29	銅版画作品鑑賞・合評1
30	銅版画作品鑑賞・合評2, 授業の振り返りとまとめ

科目名	演劇学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 前期	形態	講義		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>オペラから映画まで、「身体と言葉」の芸術である演劇を幅広くとらえ、その特徴を丁寧に探る。          受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。          この授業が、ディプロマポリシーにいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている</p>					
授業概要					
<p>受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。          取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。          随時 DVD(演劇・映画等 大阪芸術大学図書館所蔵)を利用する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>受講者それぞれが、まずは自分の興味のあるところをよく探してほしい。          相談や質問には、丁寧に答えていく。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人のテーマに応じて随時紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					



科目名	演劇学特論	年次	1	単位数	2
授業期間	2025年度 後期	形態	講義		
教員名	出口 逸平				
クラス名					
授業目的と到達目標					
<p>オペラから映画まで、「身体と言葉」の芸術である演劇を幅広くとらえ、その特徴を丁寧に探っていく。受講者の自由な発想を活かせるよう、的確にアドバイスしていきたい。この授業が、ディプロマポリシーのいう「創造性と独創性」のヒントになればと願っている。</p>					
授業概要					
<p>受講者の研究発表と質疑応答によって、授業をすすめる。取り上げる作品は、受講者の希望をできるかぎり尊重したい。随時 DVD(演劇・映画等)を利用する。</p>					
準備学修(予習・復習)・受講上の注意					
<p>受講者それぞれが、まずは自分の興味のあるところをよく探してほしい。相談や質問には、丁寧に答えていく。</p>					
成績評価方法・基準					
種別			割合(%)		
総合評価			100		
教科書情報					
教科書1					
出版社名		著者名			
教科書2					
出版社名		著者名			
教科書3					
出版社名		著者名			
参考書情報					
参考書名1	各人のテーマに応じて随時紹介する。				
出版社名		著者名			
参考書名2					
出版社名		著者名			
参考書名3					
出版社名		著者名			
参考書名4					
出版社名		著者名			
参考書名5					
出版社名		著者名			
参考 URL					
特記事項					
教員実務経験					
授業計画(各回予定)					

